



# 第1章

Soldiers in the Arab Army during the Arab Revolt of 1916-1918, carrying the Arab Flag of the Arab Revolt and pictured in the Hejaz.

2020年9月3日校正

## 第1章アラブ民族運動とパレスチナーサイクスピコ密約・バルフォア宣言の中で

### 1 アラブの目覚め

1971年2月28日、私は日本を発ち、3月1日ベイルートに降りた。それから程無くしてパレスチナ解放人民戦線(PFLP)とコンタクトをとり、まずボランティアとしての活動を始めた。



Tuyoshi Okudaira (Kyoto university) 1945-1972  
 その最初の見学を兼ねて3月、私は奥平剛士さん(注 1)と共にベイルートの郊外にあるパレスチナ難民キャンプ・シャティーラを初めて訪ねた。

小さな手作りの家が密集し、大通り以外は区画も整理されていない家々の曲がりくねった路地には、元気に遊ぶ子供たちが溢れていた。広場では少年たちが軍服姿で訓練したり賑やかだった。

前年の70年、ヨルダン内戦によってヨルダン軍に敗れ、フェダイーン(フェダは犠牲者の意味。フェダイーンは複数形。転じて「犠牲を厭わない戦士たち」の意)やその家族、難民たちがレバノンに逃れ、パレスチナ解放機構(PLO)もベイルートに本部を移していた。

そのため、私が行った時には再編期で活気に溢れ、キャンプ住民が倍増する程人が増えていると付き添った友人が説明してくれた。

キャンプ内の学校や保育園、クリニックや裁縫作業所などを見学した後、付き添ってくれたPFLPの友人のシャティーラキャンプの中の自宅に招かれた。両親、祖父、子供たちが狭い部屋一杯に集ってアラブ紅茶とアラブ菓子で私たちを歓待しながらパレスチナについて話してくれた。

彼らは、1948年4月にアッカ(Acre) からシオニストたちに家を追われた家族であった。19世紀生まれの祖父は、自分たちの家のオリーブの樹からオリーブの種を集めて作った数珠をせわしなく繰りながら歓待して詩を吟じてくれた。こんな意味の詩であった。

Arise , ye Arabs , and awake ! Ode by Ibrahim al-Yaziji

起(た)て！アラブよ！目覚めよ！

事態を真に見詰めよ！

アラブよ、お前の膝まで泥まみれなのだ。

希望を絶たれ裏切られて尚、

アラブよ、お前は何故起ためのか?!

死の槍が方々からお前を包囲しているというのに！

おお偉大な神よ！アラブを眠らしめているのは何か。

どれ程抑圧されてもアラブよ、お前は不平すら言わない。

どれ程怒りに燃えてもその怒りを遣り過ごしている。

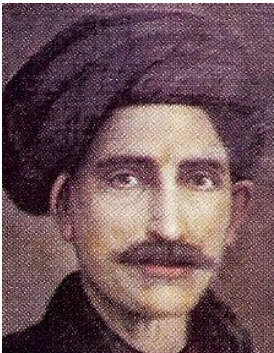
恥辱が自らの衣装になるまで！

アラブよ！お前は恥辱に慣らされてしまったのだ。

起て！アラブよ！と長く続く韻を踏んだ朗々としたアラブ詩であった。

これが「起て！アラブよ、目覚めよ」と初期アラブ民族主義を呼びかけたイブラヒーム・ヤーズィジーの有名な詩なのだと言った友人が解説してくれた。

聖地エルサレム管理からクリミア戦争(1853~1856年)の、オスマン帝国の内政に列強が介入するいわゆる「東方問題」と西欧が呼んだ侵略戦争の後につくられた詩だという。クリミア戦争の結果、ロシア帝国の侵略は食い止めたが、欧州列強が力を得てオスマン帝国を半植民地化していくことになる時代である。この宗教戦争を奇貨として、列強諸国はカソリック、オーソドックスなどミッションナリーを派遣し宗教を通してオスマンへの市場経済化を始めた。英国は、プロテスタントがエルサレムに居なかったので、「ユダヤ教徒の保護」を口実に介入した。商品や宗教、教育を通して、アラブ人キリスト教徒やアラブ人ユダヤ教徒らを通して欧米の経済、文化、知識が流入してきた。それが逆に「アラブ意識」形成の契機となった。



Nasif al-Yaziji/ Syrian Scientific Association  
/Ibrahim al-Yaziji

キリスト教徒のナーシフ・ヤーズィジーは、アラブ文字やアラブの文字の復権と保護に尽くし、文芸運動にとどまらない「シリア科学協会」を1857年に設立している。これが初期のアラブ意識といわれる。(注2)そして1868年の秘密会議で息子のイブラヒーム・ヤーズィジーのこの「起て！アラブ

よ、目覚めよ」が発表され、この詩は瞬間に、アラブ中に響き渡った。そして新しい希望のさきがけとなり、1860年代のレバノンでの統治の変革を求める闘いにつながったという。私にとってこの詩の出会い、「アラブの目覚め」、「民族」、「民族解放」という日本での自分たちと違う闘いの歴史を肌で感じとった最初の出来事であった。

鳥肌が立つ程その詩の吟の中に情念が宿っていた。パレスチナ以前に全アラブの人々の歴史、常に自らの決定権を奪われてきた生存の闘い、その歴史は翻って「抑圧民族」の日本帝国主義と闘ったアジア諸民族の視座とそれは重なって、中東で活動する上で私に重大な示唆を与えてくれた。

「アラブ人」「アラブ民族」を定義すれば、「アラビア語を日常語として話す歴史的な文化、習慣のもとに暮らす人々」がアラブ人であり、その同族帰属意識が政治性を帯びると「アラブ民族」という呼称になるだろう。「アラブ人」という方が、もっと民族を超えた広い一般概念と言える。

アラブ人は、中東からアフリカに広く暮らしている。「アラブ人」と一口にいても、彼らは他の地域の人々よりも複合的なアイディティをもち歴史や文化の違いも宗教の違いもある。有史以前の歴史、メソポタミアやエジプト文明、シュメール、アッシリアやフェニキア、ギリシア時代やイスラーム時代などの重層的な時を重ねる中で、異文化が刺激し合い反応し結晶して共存している多様な人々がアラブ人である。

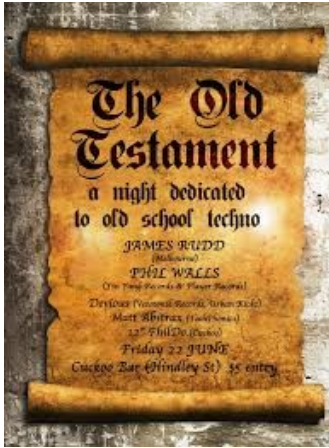
アラブ人はまた、各地域「エジプト人」や「シリア人」「パレスチナ人」など当該地域や地方、国の呼称でも呼ばれてきた。パレスチナを含む地域がオスマン帝国支配下になったのは、第9代のスルタン・セリム一世(在位1512～1520年)の時代であった。シャリーア(イスラーム法)の下での暮らしは続いており、パレスチナは小麦、オリーブなどの農業や商業で安定し、メッカ巡礼の交通エルサレム巡礼の要所として栄えていた。1830年代に仏(フランス)の後押しを受けたエジプトによって、一時占領されたが1840年には再びオスマン帝国の直接の支配下にあった。



当時のパレスチナは、「シリア」と呼ばれる行政区画の中にあつた。(現在のシリアと区別するために、オスマン帝国時代のパレスチナ、レバノン、シリア、ヨルダンを含む当時の「シリア」をここでは「大シリア」と呼ぶことにする。)

「パレスチナ」と呼ばれる地域は古くからあつたが、厳密なパレスチナの境界があつた訳ではない。大シリアの南部にあたり、当時のダマスカス州、バイルート州、エルサレム県などと分けされた地域を含み、今のレバノン南部、パレスチナ全土(イスラエルとパレスチナ自治区、占領地を含む)、ヨルダンとシリアの一部に該当する。このパレスチナに住むアラブ人がパレスチ

ナ人で、彼らの祖先は、一万年以上前にこの地に定住したカナーン人やアラム人、ペリシテ人、フェニキア人たちが混在しながら、七世紀以降の先端文明であったイスラームが制覇する中で、アラビア語を日常語として秩序を作り上げてきた長い歴史をもつ人々である。



### Philistines/Old Testament

パレスチナの地名は、旧約聖書にもある「ペリシテ人」に由来している。ペリシテ人は紀元前12世紀ごろ中東沿岸を支配したといわれる。オスマン帝国ではイスラームのシャリーア(イスラーム法)を統治の基本とし、イスラームも非イスラームも税や身分区分はあっても宗教共同体として、ギリシア正教徒アルメニア正教徒ユダヤ教徒らの自治を保障し帝国内の民として保護した。

加えてオスマン帝国は伝統的なカピチュレーション政策(外国人の特権裁判権税の免除などの治外法権)を与え外国人の生命財産の安全を保障してきた。オスマン全盛期にはカピチュレーション政策はいわばハンディをつけてロシアや西欧外国人を保護する装置であったが、産業革命を経て西欧が近代化し国民国家を形成する時代になると西欧列強はこのカピチュレーションの特権を利用して経済政治文化侵略を始めた。

古い慣習のままにあったオスマン帝国は欧州諸国の要求する市場開放を認めた通商条約を結び地域の近代化に向けて行政改革に着手した。1858年にはオスマン土地法を施行しそれが大土地所有者と小作農を生み1876年には外国人にも土地の売買が可能となった。列強諸国の介入は宗教統治システムのもとで国民、民族国家観念を持っていなかったオスマン帝国内の民族宗教共同体を煽る結果となりオスマン帝国からの独立の機運があちこちに広がった。先に述べた「アラブよ！目覚めよ」の時にあたる。



### Abdul Hamid II

こうしたオスマン帝国の退潮期、1876年8月アブドゥル・ハミード二世が即位し、12月には、憲法を公布して立憲制を宣布した。これまでのオスマン帝国の宗教を基礎とした分権的な統治が「近代化」に揺さぶられ制度の集権的再建を目指したのだろう。1877年から「立憲制」が始まり、選挙が行われ議会が開かれた。この議会選挙にはパレスチナ人も議席を得た。シオニストがスイスのバーゼルで第一回世界大会を開く20年も前に、パレスチナ人を含むアラブ人は、オスマン帝国の立憲政治のもとで閣僚を含む行政に関わっている。

しかし、1878年の「ベルリン条約」などでオスマン支配の欧州圏を失うと、アブドゥル・ハミードは議会を停止し専制に転じた。列強諸国に対抗し、これまでの理念を捨てて、「トルコ第一主義」政策に転じた。



### Young Turk Revolution

#### Committee of Union and Progress

そうするとナショナリズムが深まりトルコ至上主義が席卷し1908年には、「青年トルコ党」の革命が起こった。この政権の主張は、帝国内の「国民の統一」であり、国民のトルコ化、ナショナリズムに基づく中央集権化であった。

こうした政策はその支配下に置かれたアラブ人のナショナリズム

を覚醒させずにはおかない。

1880年12月31日には秘密結社が声明文を発し、アラブ民族主義運動が政治目的を持って登場した。それはアラブの人々にも支配者たちにも衝撃を与えた。(注3)1905年には「アラブ民族の目覚め」が仏語で出版された。ナジブ・アズーリによるもので西欧植民地主義の介入に対する政治的自覚からオスマン帝国からの独立を求めアラブ民族としての政治活動が既に始まっていく。(注4)

ナーシーフ・ヤズィジーや、イブラヒム・ヤズィジーらの「シリア科学協会」から数十年を経ている。すでにトルコ帝国下とは言え、立憲制を経験したアラブのムスリム共同体やキリスト教社会の中から宗教を超えた「アラブナショナリズム」が生まれてきた。これらの民族主義運動は立憲制の復活、アラブの自治、アラビア語の公用語化などを求めてトルコナショナリズムに対抗した政治結社を生み出していく。こうした運動の担い手は宗教勢力や知識人ら富裕層を中心にした人々であり、アラブ民族としての帰属意識の下、アラブ民族としての政治運動が動き出した。この民族主義は一方にイスラームの伝統を求める方向と他方に近代主義の政治的独立を求める知識人層とが共存して生んでいったと言える。しかし東アラブ圏では、エジプトの民族主義運動と違った道へと進むことになる。エジプトでは、英国、フランスの植民地支配によって半資本主義的な従属状態にあった分、エジプト民衆は「エジプト人のエジプト」を求めてきた。



Urabi revolt/ Ahmed Urabi

1879年から1882年の「オラービー革命」が民衆の参加の中で、反英・反オスマンの反植民地民族運動として闘われた。しかし1882年、英軍のアレクサンドリア上陸によって革命は阻まれ、リーダーのオラービー大佐は英領スリランカに流刑された。この革命は敗れたが、「エジプト人によるエジプト」の闘いは中東地

域へと影響を広げたのは間違いない。

しかし「反英・反植民地闘争」はすぐには東部大シリア方面には受け継がれなかった。中東東部地域の民族運動は反オスマン・アラブ民族独立を目指し英国と同盟し、英国に依拠する道へと踏み出すのである。

ここに最初のアラブ民族主義運動の挫折がすでに準備されたと言えるのである。1914年の第一次大戦を利用したよく知られる英国の「三枚舌外交」がその原因である。それは後に述べたい。

## 2 シオニズムの登場—パレスチナへのユダヤ建国の企み

なぜユダヤ人の中から「シオニズム」が唱えられたのだろうか。「シオニズム」とは一体どんなものなのか。ユダヤ人・ユダヤ教徒は十数世紀にわたってキリスト教社会から苛酷な迫害を受けてきた。「キリスト殺し」の種族とされ、棄教や追放を強制され、差別と困窮下に置かれてきた。

「ゲットー」と呼ばれる居住地域の困いの中に強制的に住まわされ、国籍も与えられず、職業も制限されてきた。こうした状況を変えたのは近代西欧史を拓いた「自由・平等・友愛」の1789年フランス革命によってである。このフランス革命の原則のおかげで、ユダヤ人・ユダヤ教徒らはロシア支配地域を除いて欧州で制度的にも解放され、職業や居住の自由、選挙権、被選挙権などの政治的権利を得た。

産業資本主義の発達と、仏革命の新しい価値観は、これまでの封建的な領域国家から新しい民族、国民国家を形成していく流れを作り出した。欧州の近代主義は民族・国家形成を開いた時代であった。この時代にあつてユダヤ人たちにも変化が生まれた。ウォルター・ラカー(『ユダヤ人問題とシオニズ

ム』の著者)によると、19世紀初頭の世界のユダヤ人口は、およそ250万人で、その90%は欧州各地に居住していたと言う。独には20万人いたが、ユダヤ人の大部分は、まだ大都市への居住を許されず、ベルリンではわずか3,000人が居住を許されたに過ぎず、市民や都市ギルドは依然として反ユダヤ主義が続いていた。

その一方で巨大なユダヤ財閥は富を蓄積し、各国の欧州の支配層に金融資本として結びつき、特権的な地位を築いた。ウォルター・ラカーによると1807年には既にベルリンでユダヤ金融機関の方が非ユダヤ人より力を持ち、どの政府もユダヤ資本なしには借款の調達は不可能であったと言う。

(注5)

この頃、ユダヤ人社会の中の職業構成にも変化が起こり始め、大多数は極貧の中にありつつ知的職業や小売り、工業へと就業する層が拡大し、社会的同化も始まった。その後、1871年に独仏戦争が起き、敗れたナポレオン三世が降伏し、パリコミュンが創られ、市民が初めて権力を握ったが、当時の青年たち、とりわけユダヤ青年にも大きな影響を与えただろう。

19世紀後半には、すでにユダヤ人の中に多様な傾向が生まれていた。

強いて分類してみると、第一の傾向の人々は、ユダヤ教徒の伝統的な戒律や文化を守り、ユダヤ教徒としてこれまでのように生きる人々で、多くは東欧中心にゲットーの中での生活を強いられた。第二の傾向の人々は、同化ユダヤ人「同化主義」と呼ばれる人々で、英独米などに居住し、キリスト教徒らと同じ国民として世俗的国家基準に基づいて市民的平等を求め、その国に同化して生きる道を選んだ人々である。

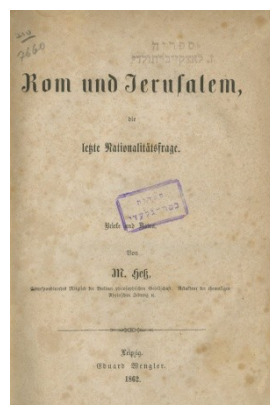


Leon Trotsky/Rosa Luxemburg

第三の傾向の人々は、社会主義・国際主義のユダヤ人たちである。これらの人々は、ユダヤ人の解放をマルクス主義と社会主義に基づいて、宗教や人種・民族国家の違いを超えたプロレタリア解放の道に解決を求める人々である。レフ・トロツキーやローザ・ルクセンブルグなど、ロシア東西欧州に及んだ革命運動・労働運動の担い手に多く見られる。中東においても社会主義・共産主義運動の先駆的役割を果たしたのはユダヤ人である。

社会主義潮流の中には、「ユダヤ人の存在を特殊条件」として「文化的自治」を唱えた「自治主義」勢力を加えることができる。全ユダヤ労働総同盟(ブント)がその中心勢力であった。

さらに第四に、言葉としては「シオニズム」とはまだ発明されていなかったが、のちにシオニズムと呼ばれる潮流である。



Moses Hess/Rom und Jerusalem 1862

この文ではこの第四の潮流について述べていく。この流れはモーゼス・ヘスが真正社会主義と批判された後に1862年に指し示した道でもある。シオニズムといっても「文化的シオニズム」「宗教的シオニズム」など多様なシオニズム潮流が生まれていた。

ロシア帝国下で1881年3月にロシア皇帝アレクサンドル二世が革命グループ「人民の意志」によって暗殺される

とアレクサンドル三世は反政府活動家やユダヤ人に対して復讐的な法令や弾圧を始めた。こうした中でポグロム(ユダヤ人虐殺)が発生し始めた。多くのユダヤ人は虐殺攻撃から逃れて中欧・米・オスマン帝国支配下へと移住するようになった。

これまでもユダヤ教徒は巡礼や宗教的文化的意味でパレスチナに入植する者たちがいた。こうした入植者たちはイスラーム教徒・キリスト教徒と共存して暮らしていた。しかしポグロムの発生によって青年たちを中心にパレスチナへの入植活動をより組織的に実践するようになった。



Eastern Europe, 1881

Bilu/Hovevei Zion("Lovers of Zion")

学生の「ビルー」グループ(注6)や「シオンを愛する者」と名乗る小さなグループなどがパレスチナにユダヤ人コミュニティを「定住させる」(「イシューブ」と言う。つまりユダヤ人共同体)を目指し移民の波を組織した。「シオン」とは旧約聖書におけるエルサレムの呼称の一つである。

1884年にはパレスチナに移住しユダヤ人共同体づくりを組織的に行えるよう国境を越えた組織「シオンを愛する者」を作り上げた。『自力解放』と言う冊子を発行し、自己の力でパレスチナにユダヤ人共同体を作り生きていくことを訴えたオデッサの医師レオ・ピンスケルが「シオンを愛する者」の長に就いて寄付を集める活動を活発化した。こうした動きに対してオスマントルコ政府は1885年ユダヤ人の入国を制限した。「シオンを愛する者」は大量移民と民族再生を目指したが財政的にも法的にも困難に直面した。

しかしロシアやポーランド・ウクライナの「シオンを愛する者」に共鳴した人々がウイーンや独仏でも活動を受け入れた。



Nathan Birnbaum

「シオニズム」と言う言葉はナタン・ビルンバウム(オーストリア生まれの同化ユダヤ人ジャーナリスト)が発案して1892年1月23日の会議で初めて公に用いた。(注7)

エルサレムのシオンの丘に帰る、つまりパレスチナにユダヤ人の故郷を再建する運動として「シオニズム」が語られるようになった。ビルンバウムは、シオンの地「エレッツ・イスラエル」(イスラエルの土地)に自分たちの国を作ると言う意味で政治的なこの運動を「シオニズム」と命名した。ビルンバウムは「シオンを愛する者」らの政治的経済的裏付けのないやり方ではなくトルコ政府の信用を得よう訴えた。このようにシオニズムは欧州やロシアのユダヤ人迫害からユダヤ人のホームランドを持つと言う運動として出発した。



Theodor Herzl

こうした流れの中、テオドール・ヘルツルは1895年著書『ユダヤ人国家』を出版した。ヘルツルはこの本を出発点に政治シオニズム運動を世界に広げ大規模なその力で帝国諸国と協力してユダヤ人国家を作るよう訴えた。ヘルツル自身は同化ユダヤ人のブタペスト生まれのジャーナリストでユダヤ教には冷淡な人物として知られていた。しかし「ドルフェス事

DER  
JUDENSTAAT.

VERSUCH  
EINER  
MODERNEN LÖSUNG DER JUDENFRAGE  
VON  
THEODOR HERZL  
DOCTOR DER RECHT.

LEIPZIG und WIEN 1896.  
H. BENTZENSTEIN'S VERLAGS-BUCHHANDLUNG  
WIEN, 15. KRAUENBURGSTRASSE 1.

件」(仏のユダヤ人の大尉ドルフェスが機密漏洩で有罪判決を受けた事件。後に無罪と判明したが反ユダヤ思想による冤罪事件)をパリで特派員として滞在中に現認し、ヘルツルは同化しても反ユダヤ主義は消えないと、「分離」つまりユダヤ人が絶対多数を占めるユダヤ国家建設に向けて全力を注ぐことにした。

ヘルツルは著書の中で「私が考案するものは何一つない」(注8)と表明し、これまで何度も語られてきた古いユダヤ人国家を今こそ実現すべきだと力説した。この本の中で示されているのは何よりもそこに住む人々に対する考えが全く欠落していることに驚かされるが、それはこの考えの根本的欠陥を示している。この本『ユダヤ人国家』の中でヘルツルの描くユダヤ人国家とは第一に西欧中心の西洋文明崇拜でありその鑄型の中にユダヤ人国家を描いていることである。ヘルツルは次のように記している。

「もしも(オスマン帝国の)スルタン閣下が我々にパレスチナを与えるならばわれわれはその代償としてトルコの財政を完全に管理することを申し出るであろう。欧州のために、われわれはその地でアジアに対する防壁の一部を作り野蛮に対する文化の前哨の任務を果たすであろう」(注9)とし、パレスチナにある全キリスト教徒の聖地のために治外法権をもって守ると表明している。

つまり欧州列強の植民地支配の先兵の役割を果たすユダヤ人国家を描いたわけである。

第二にはヘルツルは領邦君主、主権者たちと交渉しあるいはそれらの権力の保護の下で国家を創るとしている。つまり列強帝国支配層からユダヤ人国家の「特許状」を得ることを建国の方法とした。「最初の目的はすでに述べたように我々の正当な必要を満たすに十分な広さの地域に樹立される国際法上保護された主権である。」(注10)として独皇帝、英、仏支配者、オスマン帝国スルタンら権力者の特別の許可による国づくりを求め行動した。こうした方法は必然的に植民地支配下にある人民に敵対せざるを得ない。

第三に同化ユダヤ人のヘルツルにとってユダヤ人の領域国家は必ずしもパレスチナではなかった。本の中ではヘルツルはパレスチナとアルゼンチンを検討している。パレスチナの方がユダヤ人にとって歴史的愛着があり移民が容易であろうと言う考えであった。もちろんこうした考えは、「シオンを愛する者」らロシア東欧シオニストらの反対にあう。ヘルツル死後、英国政府からウガンダなどの案も提示されたが、パレスチナに固執していったのである。

第四に、ヘルツルの国づくりは、「ユダヤ人協会」と「ユダヤ会社」を作り、「ユダヤ人協会はユダヤ人たちの新しいモーゼなのである」として、「ユダヤ人協会が科学的政治的に準備したものを、ユダヤ会社が実際に遂行する」(注11)としている。政治的ばかりか経済的にも国家代執行業務の構想を示した。また、宗教国家を否定し、「信仰がわれらを一つにつなぎとめ、科学が我々を自由にする」とし、「誰も自分の信仰ないし無信仰にかけては国籍の場合と同様に自由であり制約されない」(注12)、と近代欧米の世俗基準を示している。つまり、ヘルツルの「ユダヤ人の分離」とはユダヤ人の西欧への集団同化とも言えるものであった。

また第五に言語においてもヘルツルはユダヤ文化への愛着は乏しい。イーデッシュ語については「我々が今用いている歪められた抑圧された汚い言葉ゲットー語を使う悪習を止めるべきだろう」(注13)と述べている。このようにヘルツルのユダヤ人国家はユダヤ教の宗教共同体を利用し欧米世俗主義の価値観に基づく民族国家を作ろうとする矛盾に満ちたものであった。





1th World Zionist Congress (1897)

テオドール・ヘルツルやナタン・ビルンバウムのイニシアチブによってスイスのバーゼルで1897年第一回シオニスト世界大会がもたれ、その実行が決定された。曰くシオニストの目的はユダヤ人のために公法によって保障される郷土をパレスチナに創設することであると宣言した。そして「バーゼル計画」を採択した。バーゼル計画では、第一にパレスチナへユダヤ移民労働者農民による植民地化の促進、第二に世界のユダヤ人組織化のためのシ

オニスト機関を創設する、第三に各国政府に同意を得るための工作を決定した。以来パレスチナへのユダヤ人入植建国を唱える政治運動を政治シオニズム、その提唱者と信奉者は「シオニスト」と呼ばれた。

私がかれ以降「シオニズム」「シオニスト」と言って批判するのはこの「政治シオニズム」である。もちろん当時はユダヤ人にいろいろの考えがあり同化主義者たちはシオニズムによって反ユダヤ主義が増幅され迫害と追放が増大すると声を大にして反対した。その危惧はのちの歴史に示される。しかしシオニストは「土地なき民に民無き土地を」のスローガンでパレスチナへの入植を進めた。そこには紀元前1500年ごろにかつてユダヤ人が移り住むずっと前から暮らしてきたカナーン人らの子孫やその頃に移ったアラブ人ら様々の種族の人々が住んでいた。アラブ人たちはオスマントルコによって150万人を超える虐殺に遭い逃れてきたアルメニア人を受け入れるように、はじめはユダヤ移民を温かく迎えた。ユダヤ人シオニストがまさか自分たちを追い出してパレスチナにユダヤ人国家を作るとは考えてもみなかったのである。

シオニストはユダヤ資本家の力で西欧植民地支配の片棒を担いでパレスチナアラブ全域で共同しながらユダヤ国家建設へと進んだ。

ヘルツルとともに第1回シオニスト大会を領導したナタン・ビルンバウムは「シオニズム」の命名者であったが、後にシオニズムの厳しい批判者となった。ビルンバウムは、ヘルツルらエリート同化ユダヤ人がユダヤ人の文化伝統を歪め西欧中心主義によってシオニズムを進めることに反対した。

彼はユダヤ民族としてユダヤ人のイーディッシュ語文化、信仰、伝統的価値観こそ民族再生運動の中心と捉えたのである。ビルンバウムは、当初は文化シオニズムと政治シオニズムの統合を目指そうとしたが後にヘルツルの政治シオニズムを批判しイーディッシュ語と文化の保護に尽くしている。

ビルンバウムはユダヤ人はその生活の場においてユダヤ人の伝統文化の権利を守る活動をすべきだと訴え自らもその活動に転じた。またこの政治シオニズムの中には西欧の仏英語圏の同化ユダヤ人アシュケナジームによるかってスペインを追われたスファラディームや東方ユダヤ人への差別、ロシアシオニストによる西欧シオニスト批判などが続いた。

1905年のロシアの第一次革命の影響を受けたロシアの宗教的シオニズムや社会主義シオニズムの力も増大しヘルツルの死後ロシア東欧シオニストたちの勢力が増大した。シオニストはまたヘルツルの路線に沿って英国では力を発揮した。それらは第一次大戦を利用してシオニストの建国の扉を開こうとしていた。

### 3 第一次大戦と英国の三枚舌外交

第一次大戦によってオスマン帝国を破り中東の植民地支配を目指す大英帝国は汚い手を使った。有名な大英帝国の三枚舌外交である。これは現在に至る中東危機・混迷の歴史的原因である。これらはよく知られた事実だがパレスチナ問題の原因をなしているのでもまず触れねばならない。

第一の舌は1915年から1916年にかけてメッカの太守フサイン・シャリーフにアラブ独立を約束した

「マクマホン書簡」である。第二の舌は1916年3月から5月にかけて作成された英仏露による「サイクス・ピコ秘密協定」であり第一の約束を反故にする内容であった。さらには第三の舌でシオニストに英国政府が約束した1917年11月2日の「バルフォア宣言」である。これは第二の協定を利用しさらにアラブ

## The Hussein-McMahon Correspondence 1915/ 16

Sayyid Hussein bin Ali,  
Sharif of Mecca



Sir Henry McMahon,  
British High Commissioner  
in Egypt



ブ独立の約束を裏切るものであった。第一の「フサイン・マクマホン書簡」は、英国とフサインの野望として結実した。メッカのフサイン・ハシミテ家は預言者ムハンマドの血筋として特別視されると同時にトルコからは警戒されアラブ支配の人質のようにコンスタンチンノーブルでの生活を強いられてきた。アブドルハミドに恭順を示してフサインは後にやっとメッカの太守として戻った。しかしフサインは青年トルコ党の集権体制やメッカへの鉄道敷設計画による支配の強化を見越し、エジプト駐在の英国の高等弁務官マクマホンと密かに書簡を交わしながら英国側と交渉していた。

フサインとマクマホンの書簡は1915年7月

14日から1916年3月1日まで10通に及ぶ。英国はこれまで400年オスマン帝国と友好を示してきたが、独と同盟したオスマン帝国に対し宗教を利用してフサインを持ち上げ反乱を促した。1914年にはカリフ制を保持できるムスリム共同体はアラブ人共同体のみだと言い出しアラブ人こそメッカ・メディナでカリフ制を打ち立てる資格があり、英国はそれを武力で守る準備があると唆した。そして書簡ではオスマン帝国支配にアラブの反乱を求め、その見返りにオスマン帝国崩壊後に英政府は「アラブの独立」を約束したのである。狡猾なフサインも騙されぬようマクマホンに当時のオスマン行政区地名を示して詳しく戦後のアラブ独立の領土を英国側に確認している。その中に現在のレバノンのベイルートなどの海岸部はキリスト教徒が多いので含んでいないが、パレスチナ、シリア、イラク、ヨルダンなどは、アラブ独立国家の領域として英国は約束している。

一方、オスマン帝国は、第一次大戦がはじまると、この戦争は西欧列強のイスラーム世界に対するキリスト教世界による侵略戦争だと位置づけてアラブ各指導者に決起同盟を求めた。

フサインはそれを支持すると言いつつアラブ独立を求める民族主義者、宗教指導者、地主、都市名望家やオスマン軍のアラブ将校らと秘密に協議しつつ反乱を準備した。

そしてフサインの指示のもと1916年6月2日アラビア半島ヒジャーズ地方の聖地メディナのオスマン軍を攻撃し「ヒジャーズ国」としてアラブの反乱を宣言した。

英国の資金武器を受け、英情報将校のT・E・ロレンスを顧問にフサインの三男ファイサルが司令官としてアラブ軍を率いた。アラブ軍は英軍と連携し1917年7月には要衝アカバを制圧した。乗じて英軍は1917年12月シナイ半島を越えてエルサレムに進軍しパレスチナを制圧して軍政を敷いた。

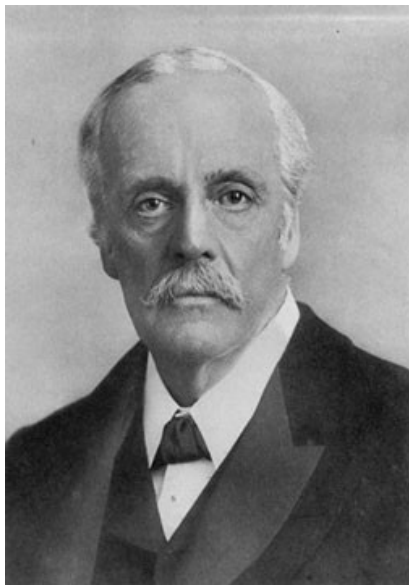


しかしアラブ独立を約した一方で英国は1916年春から5月の間、英仏露の秘密会議でオスマン帝国の領土分割を協議した。一時期バイルートの仏総領事だったジョルジュ・ピコと東方問題に詳しい政治家のマーク・サイクス卿が英国を代表しペトログラードでロシア側と交渉した。

この合意は1916年5月でアラブ軍の反乱開始の直前である。この秘密協定書の最後に「英政府はさらに日本政府に対して現在締結された協定について通報すべきであると考え」と記されている。日本は当時日英同盟を結んでおりこのサイクス・ピコ秘密協定の中東分割密約の責任の一端を負う立場にあったのである。

もちろん英政府は「サイクス・ピコ密約」をアラブ側に隠し、また「フサイン・

マクマホン書簡」を露、仏に対して隠したのは言うまでもない。フサインが知るのは18ヶ月後レーニンのボルシェビキ政権の外務委員レフ・トロツキーによって「サイクス・ピコ密約」が暴露され破棄宣言されたことによってである。



Foreign Office,  
November 2nd, 1917.

Dear Lord Rothschild,  
I have much pleasure in conveying to you, on behalf of His Majesty's Government, the following declaration of sympathy with Jewish Zionist aspirations which has been submitted to, and approved by, the Cabinet.  
"His Majesty's Government view with favour the establishment in Palestine of a national home for the Jewish people, and will use their best endeavours to facilitate the achievement of this object, it being clearly understood that nothing shall be done which may prejudice the civil and religious rights of existing non-Jewish communities in Palestine, or the rights and political status enjoyed by Jews in any other country."  
I should be grateful if you would bring this declaration to the knowledge of the Zionist Federation.

*Arthur Balfour*

第三の舌、英国の犯罪は1917年11月2日の「バルフォア宣言」である。1915年、戦時アスキス内閣の閣僚となっていたシオニストのハーバート・サミュエル(ポーランド移民の家系のユダヤ教徒)は閣議で提案している。その内容はスエズ運河東部の守りとして英国がパレスチナを併合し300万から400万人のユダヤ人の入植定住を行う案だった。(注14)

アスキス首相は支持しなかった。しかしこの構想に賛意を表したロイド・ジョージが1916年12月アスキスに代わって首相の座に就くので

ある。このときの外相がアーサー・バルフォアである。

ロイド・ジョージ政権はシオニストやユダヤ資本に助けられつつオスマン帝国との戦争を続けるのだが、彼が首相になるとすぐバルフォア外相に指示しシオニストとのユダヤ人の民族郷土に関する交渉を行っていく。



Mark Sykes/Herbert Samuel, 1st Viscount Samuel

この英国側交渉担当者はマーク・サイクスであった。サイクスは「マクマホン書簡」にも「サイクス・ピコ密約」にも通じていた。

一方シオニスト側代表団には英国シオニスト連盟のワイツマンもいたが、変わり身でハーバート・サミュエルはロイド・ジョージの入閣要請を断ってシオニスト側交渉団に加わっている。彼、サミュエルは後に最初の「パレスチナ高等弁務官」として英最高権力者としてパ

レスチナに登場する人物である。

さらに当時シオニストは、ポーランド人・ソフロフらが中心に仏政府からも、ローマ教王からも、ユダヤ郷土建設の約束をとりつけて英政府に迫った。

そして、シオニスト側は、ユダヤ資本による戦争協力、米国への参戦説得など英国側に約束したという。しかしそれよりも当時、ロシア革命の影響で、ウィルソン米大統領は、民族自決を主張し領土併合に反対していたので、英は中東植民地支配にとって「ユダヤ人のナショナルホーム」をつくるための「委任統治」と「保護」を口実とするのが都合が良かったに違いない。国を作りたいシオニストと「保護」や「委任統治」と言う大義を利用して植民地支配をもくろむ大英帝国の野合の結実として1917年11月2日「バルフォア宣言」は生まれた。それはまたプロテスタントのキリスト再臨を求める福音主義の「ユダヤ人のパレスチナ帰還」の宗教的終末思想を実現するという意図もまたあったのだろう。

「バルフォア宣言」にはサイクスやロイド・ジョージ、ハーバート・サミュエルらの「意図した曖昧さ」が合意に隠されている。「バルフォア宣言」は以下の文である。

「親愛なるロスチャイルド卿、英政府を代表して私はユダヤ人シオニストの願望への共感を表す、以下の宣言をお伝えします。これは閣議で承認されたものです。『英政府はパレスチナにユダヤ人のための民族郷土を建設することを好ましいことだと考える。わが政府はこの目的の達成を助けるために最善の努力をするだろう。ただし次のことをはっきりと理解しておかねばならない。パレスチナに存在している非ユダヤ人社会の市民的宗教的権利あるいは他の諸国に住むユダヤ人の権利や政治的地位を損なうような事は何もしてはならないと言うことである。』この宣言をシオニスト連盟にお伝えいただければ幸いです。1917年11月2日」としてバルフォア外相が署名している。(注15)

ロシアボルシェビキの社会主義革命の直前のことであった。「意図された曖昧さ」とは、第一に「民族郷土」と言う概念にある。「ユダヤ人国家」とせず列強の同意可能性を考慮したばかりか三枚舌の当事者であるサイクスとしては後に「ユダヤ人の共同体をパレスチナの一部に作る」と言う言い訳でアラブ側を説得するためであろう。そのため「a national home」とし「the national home」とはさせなかった。(注16)「ザ」はパレスチナ全部を指すからである。

第二になぜ非ユダヤ人は「市民的宗教的権利」のみなのか？ 政治的法的権利つまり民族自決独立を求めるアラブの意志を排除し隠蔽する文言である。しかしこのように「バルフォア宣言」はシオニスト側の大勝利となった。

この「バルフォア宣言」によって同年12月パレスチナに進軍した英軍政下でシオニストがすぐ動き始めようとしていた。1918年3月には英シオニストのリーダー、ワイツマンはアカバのアラブ軍司令官ファイサルを表敬訪問しつつパレスチナに乗り込んでいく。

#### 4 第一次大戦とアラブ民族主義

英国の三枚舌外交を知らぬアラブ側は「フサイン・マクマホン書簡」の約束を信じて「アラブ独立」の希望のもとよく闘った。英国・アラブ同盟軍の勝利に反比例してオスマントルコ軍は徐々に総崩れとなった。



[The Great Arab Revolt, Wadi Rum, 1917/ T.E. Lawrence

こうして8.000人を超えるアラブ軍は1917年9月30日ダマスカスに入城し市民の熱狂的歓迎を受けた。オスマン帝国の支配は崩壊しダマスカスを首都とする「大アラブ王国」が実現されたと、人々はアラブ国旗を掲げ祝した。しかし英仏による反トルコ海上封鎖と輸送の

停止で食料は底をつき30万人の飢餓による死者が記録された。米赤十字会長に同行した記録でも「内輪に見積もってもレバノンだけでこの2年間に事実上の餓死は12万人を下るまいと思われる」と記されている。(注17)

こうした代償のもとでアラブ独立が闘われていた時に英国の三枚舌の陰謀の一部がアラブに伝えられた。一つはロシア革命政府の「サイクス・ピコ密約」の暴露であり、もう一つは「バルフォア宣言」である。



Djemal Pasha

すかさずオスマントルコのジャマル・パシャ総督は「アラブは英仏に騙されている」と訴え、共同して反英仏連合軍の戦線を築こうと訴えた。英国を信じていたフサインはトルコ側の申し出を拒否して英国に釈明を求めた。英政府はバルフォア外相の名で「ボルシェビキがペトログラードの外務省から発見した文書は実際に締結されたものではない。アラブ反乱以前にトルコとの戦争に英仏露の紛争を回避するための予備的な意見交換だ」とすぐに虚偽の内容の電文をフサインに打ったのである。(注18) 電報のあと、1918年2月8日正式書簡で再確認まで英外務省はフサインに送っている。

その一方、ロイド・ジョージとバルフォアは、ロシア革命によって破棄された「サイクス・ピコ協定」を再び仏と英で領土分割すべく、仏側と第二次協定交渉に入りパレスチナを英国支配下に置く画策に入るのである。

この「バルフォア宣言」「サイクス・ピコ協定」はアラブの民族主義者知識人らを中心に騙されるなど引き続き英仏へと釈明要求があり繰り返し英国が書簡を送り沈静化を図ろうとした。が、ロシア革命を経て「民族自決」「アラブ独立」を求める声は英仏が実際軍をアラブに駐屯させているので鎮まらない。そのため1918年11月7日英軍在アラブ司令部から公式の声明が発表された。曰く「この戦争の目的がトルコの抑圧下にある住民の解放であり自ら選択した民族政権樹立の支援であり英仏は将来の民族自決と自治のアラブ国家に対する私心のない助言者である」と。そして英仏軍政当局はこの声明文を全町村に伝わるよう掲示などまで指示した。(注19)

英仏政権は中東支配を着々と進めつつ厚かましくも虚偽の大衆慰撫戦術で時間稼ぎを行った。



Paris Peace Conference (1919–1920)/ Versailles Peace Conference

1919年1月のパリ講和会議に向けて英政府が行った事は、アラブ側への嘘の宣伝と「サイクス・ピコ密約」の再確定で、マクマホン

書簡で約束したパレスチナを含むアラブ独立領土を英国の植民地に置くための仏との交渉であり、かつ政治的な抜け道「委任統治」正当化の準備であった。

1918年11月11日第一次大戦の休戦協定が発動した。アラブ軍司令官ファイサルはフサインの名代として、アラブ・ヒジャーズ国代表団を率いてパリ講和会議でアラブ独立を実現すべく訪欧した。



Emir Faisal's delegation at Versailles, during the Paris Peace Conference of 1919. Left to right: Rustum Haidar, Nuri as-Said, Prince Faisal, Captain Pisani (behind Faisal), T. E. Lawrence, unknown member of his delegation, Captain Tahsin Kadry

Faisal I of Iraq/ Fayṣal al-Awwal ibn al-Ḥusayn

ファイサル一行は1918年12月ロンドンに着いた。そこで初めてファイサル一行は「サイクス・ピコ密約」はトルコやソビエト政府のデマではないこと、その上英仏で繰り返しその獲り分をめぐって今も再交渉中であることを知った。またロイド・ジョージ内閣が、仏側と「バルフォア宣言」履行のためにパレスチナ全土も英の委任

統治下に置こうとしていることも、つまり英仏によるアラブ分割の現実を知ったのである。ファイサルたちはこうした陰謀策術文化、マナーに不案内なばかりか、陰謀の片棒を担いでいるロレンスやサイクスしか知らず、彼らの通訳に依存する他なく「盟友」ロレンスの「助言」をうけて行動するしかなかった。

英国外務省は、パリ会議の前にロレンスの案内兼通訳でまず「ファイサル・ワイツマン協定」を結ぶよう説得にかかった。ワイツマンは「バルフォア宣言」の功労者シオニストの英代表である。ワイツマンは常に欧州では「シオニズムとは英国が英国人、米国が米国人のものであるようにパレスチナをユダヤ人のものにするための運動である」と言っている人物である。

1919年1月3日付で合意されたと言う「ファイサル・ワイツマン協定」では「バルフォア宣言」の履行をファイサルが保証する、ユダヤ人入植に関してもパレスチナの一地域にユダヤ人が入植すると説明されたままに合意している。

ファイサルとしては仏側からはパリ講和会議への出席を拒否される中、英国頼りで拒否できなかったのだろう。ファイサルは「合意の但し書き」として自分が英外務省に提出した通りなら協力するが、無効かつ無益または有効性を欠くときは拘束されないと記して提出している。(注20)

ファイサル一行はパリ講和会議にはやっと2月に向かったが1月から始まっており、フランスは、「ヒジャーズ王国(フサインの国)は連合側側の交戦国の1つとして公式に認められていない」とファイサルらの参加を拒否した。シオニストのワイツマンは参加を認められているし、その上欲張りなユダヤ国家案を会議で公表した。



This is the map of the land that Jews were saying they wanted to create their Jewish state that they presented at the Paris Peace Conference of 1919.

「マクマホン書簡」の約束からは、あまりのアラブに対する仕打ちであった。

ファイサルは英仏の空気を知った1月29日声明によってアラブ側の立場を表明し、またパリ講和会議のアラブ問題聴聞会で演説し訴えた。すでにアラブ側はダマスカスにアラブ独立政府の実体を持っていると言う矜持があったためだろう。「トルコに対する反乱を指揮した父の名代として自分はパリ和平会議に参加している」と宣言し、「シリアトルコ国境を結ぶ線から南下してインド洋に至るアラブ諸国人民が国際連盟の保障の下、独立自主国民として認められるためにパリに来たこと。

既に主権国家であったヒジャーズと英国保護下にあるアデンはアラブの要求から除かれるが、既に存在する諸国家国境の画定などを含む新国家は関係住民の希望を確認しアラブ内部で調整すべき問題である。これらは適切な時期に我々アラブ政府によって発表される」と釘を刺した。そして自分たちの要求に対し米国ウィルソン大統領声明の民族自決・被統治者の同意などの諸原則に基礎を置き列強側が自分たちの物質的利益よりもアラブ語圏の人民の心身のために重点をおくことを信じて止まないと訴えた。(注21)



Woodrow Wilson/President of the United States of America

このファイサルの提案を支持したのは戦争による領土併合に反対してきた米国ウィルソン大統領であった。フランスは反対したがウィルソン大統領提案によって中東に調査団派遣が1919年3月決定された。

この調査団に望みを託し4月ファイサル一行はフランスを発ち帰国した。

一方アラブでは、「ファイサル・ワイツマン協定」やパリ講和会議の進行に疑念が再び深まったのは言うまでもない。英仏への不信とファイサルの欧州での行動に不満を持ちファイサルの戻った5月、各地各層の民族主義者や代表者が集ってダマスカスでの会議を開いた。オスマン軍に反旗を翻した軍人ら民族主義者たちは「アラブ独立党」を結成してイニシアチブをとり、パレスチナ各地で選挙を行い選ばれた85人の代議員のうち69人が出席して7月2

日「シリア全体会議」を開催した。(注22)

フランスは妨害したため仏軍政下の代議員の参加が拒まれ出席できなかったがこの会議で10項目の決議文を全会一致で採択した。

その内容は第一に大シリアの完全な政治的独立を求め、第二に、このアラブ独立国家はファイサルを王とする大シリアの民主的立憲君主制であり、第三には「委任統治を必要とする」としたアラブに統治能力がないとする主張に抗議し、第四には占領や植民地化の終結を訴えるウィルソン宣言を高く評価し米国に援助を求めた。第五にはパレスチナに関しユダヤ人の自治政体の創設を求めるシオニズムに反対しシオニストの移住を拒否しアラブ人ユダヤ教徒にアラブの共通の権利を求める呼びかけなどである。これらはロシア革命の対抗上生まれたウィルソン宣言への強い期待が示されていた。

このアラブの動きの間に調査団が中東を訪れた。仏は派遣を拒否した。英国の調査団代表団の中にはまたもやマーク・サイクスがいた。しかしサイクスは現地を見て仰天してしまった。これまで「ユダヤ人とアラブ人の共存が可能」と吹聴してきたシオニストがパレスチナでやっているアラブ排除に強い衝撃を受けたのである。

サイクスはやっとシオニズムの野望の誤りに気づきました「サイクス・ピコ協定」も同様に適用不能で無益だと悟ったのである。2カ月の現地調査後サイクスはシオニストの野心を暴露し押し止め無効とするよう、ロイド・ジョージやバルフォア、在英シオニストに説きはじめた。

しかしこの重大な局面「シオニズム支持者」から「批判者」に転じたマーク・サイクスは唐突に急死した。「スペイン風邪」「インフルエンザ」といわれるがシオニストには願ってもないサイクスの死である。

また米国大統領ウィルソンは英仏の植民地支配を怪しみ彼らが合同調査団を派遣しようとしないうち、米国調査団(キング・クレイ調査団)を派遣した。(注23)

調査は6月10日パレスチナから始まり6週間1800件の請願を受け8月にパリに戻った。この「キング・クレイ調査団報告書」は、シリア、パレスチナ、イラクの委任統治は一定の期限付きとすることを求め内容はダマスカスでの「シリア全体会議」のアラブの意志を汲んだものであった。

パレスチナに関しては米国調査団は当初はシオニストに好意を持って調査に入ったがシオニストの

パレスチナでの行状からシオニストの野心の制限を勧告するに至ったと述べている。シオニストによる乱暴な土地の収奪などを見聞し「このようなユダヤ人の征服はたとえ各種の形式上の法に触れずに達成されたとしてもそれはアラブ人の権利と連合国並びにウィルソン大統領によって提唱された諸原則を全く蹂躪するものである」と記した。

そして英軍政下の高官もシオニスト計画は武力を行使せずに達成は不可能であると例外なく述べたとしてパレスチナをユダヤ人の自治政体にする考えは放棄されるべきだと米国調査団は勧告した。

(注24)

しかしパリ講和会議の英仏当事者とシオニストたちは一読してこの報告書を無視し握りつぶすことにした。どこにも公表を許さずその間に大急ぎで英仏のイニシアチブで「サイクス・ピコ改定案」を作成して英仏の中東分割を決めファイサルを再び9月欧州に呼んだ。それを認めさせるためである。このロシアを除いた新たなサイクスピコ秘密改正案は、領土の分割と同時に、石油利権の分割、トルコ石油会社が持っていたメソポタミア石油利権の処理にあたり、ドイツ銀行が所持していた25%の株をフランスに分け、将来は英仏が共同してこの地方の排他的石油開発を行うことを約束しあった。

新たな「サイクス・ピコ協定」では英軍政のうちパレスチナ・イラクなどは英委任統治となり、仏の委任統治についてはファイサル自身が交渉を仏とせねばならないと言う現実がファイサル一行を待っていた。渋るファイサルに「講和会議決定までの『暫定措置』だからとして認めさせた。ファイサルらはヒジャーズ国含め全て英政府の財源に頼って成り立っているために圧力に抗しきれないまま、仏クレマンソー首相にも合意した。これが現在知られる中東地域の英仏植民地支配の原型である。

すでにアラブ側では怒りが爆発し仏軍との間で武力衝突が始まった。1920年3月8日「シリア全体会議」は仏支配を拒否しファイサルを王とする立憲君主制国家として大シリアの独立を宣言した。

イラクもフサインの次男アブドゥッラーを王に推戴しイラク独立を宣言した。

アラブから見れば、「マクマホン書簡」で約束され、すでにアラブ政府としてオスマン帝国を引き継いで行政を行っており、1918年11月7日の「英仏共同宣言」に沿えば「アラブ独立宣言」は当然の結果であったし、国際社会が認めない方が不当であろう。

ところが、英仏政府は手のひら返して「アラブの独立国家宣言にはいかなる合法性も認められない」と直ちに共同声明を発した。そして英仏政府は早期に秘密裏に中東支配のための決着を急いだ。これが「サン・レモ会議」である。1920年1月10日にはベルサイユ条約は批准発動していたので国際連盟規約に基づく委任統治が求められたが、それに違反してサン・レモ会議の採択を急いだ。つまり英仏が「サイクス・ピコ協定」で罫ぜり合いでやっと決めた中東の領土分割に沿った委任統治が決定されたのである。

このサン・レモ秘密会議では中東地域で「アラブ独立国家宣言」を行った大シリアとイラク国家に対して、一顧だもされなかった。「マクマホン書簡」や11月7日英軍在アラブ司令部の発した「英仏共同宣言」なども話題にさせなかった。

4月25日サン・レモ秘密会議決定は5月5日公表された。「サン・レモ会議」には日本も採択に参加したが、英国との同盟にありアラブの実情を理解して承認したか疑わしい。

いずれにしてもシオニストの要求通りにパレスチナは英委任統治下に置かれ、その中に「バルフォア宣言」も明記された。



After the resolution on 25 April 1920, standing outside Villa Devachan, from left to right: Matsui, Lloyd George, Curzon, Berthelot, Millerand, Vittorio Scialoja

San Remo conference

それに付け加えてサン・レモ会議はパレスチナの非ユダヤ人



共同体の現存する権利を保護すると言う一項も追記した上で英委任統治とした。パレスチナと石油利権、ペルシア湾からインド洋へと抜ける戦略的要求からイラク(今のクウェートも含む)を英は手に入れた。

フランスはシリアと地中海沿岸のレバノンをやはり委任統治の名で手に入れた。日本も「サン・レモ会議」によって英仏植民地支配に初めから加担したわけである。

またこのサン・レモ会議の決定は今に至るクルド人居住地域を国境で引き裂いた悲劇の元凶でもある。ここに至ってアラブの人々は帝国主義者のだまし討ち、オスマントルコと比較にならないほどの美辞麗句を用いた狡猾残忍さを知ったのである。早くも仏政府は7月14日付でダマスカスのアラブ政府に対して最後通牒突きつけた。仏の委任統治の無条件同意、仏の通貨制度の採用、鉄道とそれに沿う都市アレppoやダマスカス、パールベックなどを直ちに仏軍に引き渡すことなどを通告し敵対行為者への処罰を宣言した。アラブ政府はファイサルに宣戦布告を発するよう求めた。ところがファイサルは議会も開かず代表者とも相談せずにこの仏の最後通牒を受け入れた。英仏の圧力に屈したのである。(注25)



Faisal I of Iraq

彼はアラビア半島ヒジャーズ地方の人であり大シリア地域の出身ではない。ダマスカスを失ったり、アラブ民族主義者の信任を失うことよりも英仏の信任を失うことを恐れたのである。その上フランス軍はファイサルのアラブ政府が最後通牒を正式に受け入れたにもかかわらず条件の履行を無視してダマスカスへと軍を進めた。ダマスカス市民が非暴力決起し抗議の声をあげると銃弾で応じた。

100人を超す人々が殺された。またファイサル政府の意向を無視して抵抗した2000余の兵士たちは仏軍の爆撃や機関掃射に殺された。10日余の戦闘でフランス軍は虐殺を繰り返してダマスカスを占領した。そのうえ仏政府の最初の指令の1つは大シリア王のファイサルの国外追放処分であった。

(注26)

7月28日出国を余儀なくされたファイサルは側近を連れてヒジャーズではなくダマスカスから勝利のアラブ軍の凱旋の道を逆にたどってハイファ港からロンドンへと向かった。ファイサルの頼るべき友はやっぱりまた英国だったのである。

農民や労働者のように地を這う生活など思いもよらないファイサルは、生活のパトロンである英国抜きには生きていけないのである。ファイサルを失ったアラブ民族主義運動は初めて圧力をはねのけて反英・反仏・反バルフォア宣言、反植民地闘争を激しく闘いはじめた。しかし、伝統的イスラーム主義や近代主義にアラブ民族主義を位置づけようとする考えなど混在し未成熟なまま民族主義運動は激化していた。元オスマン軍将校、兵士ら民族主義者宗教者ら中心に闘いは大シリア・イラクの各地で全人民的なものとなり武装闘争が恒常化した。アラブ人は「サン・レモ会議」とその決定によって虐殺され愚弄されたこの1920年を、「アラブのナクバの年(破局・惨劇の年)」と呼んでいる。

この1920年6月ロイド・ジョージの仲間のシオニスト・ハーバート・サミュエルは、早々に「初代パレスチナ高等弁務官」としてパレスチナに到着した。「英委任統治」とはつまりシオニストによる「パレスチナへのユダヤ人国家建設」なのである。

パレスチナでは宗教、部族指導者らがハイファで会議を開き、「バルフォア宣言」のユダヤ人の民族郷土建設支持に反対し、パレスチナ民族独立政府を英に要求した。「アラブのナクバ」の1920年アラブ民族主義運動は新しい社会を描ききれぬままだったが、はっきりと英仏植民地主義に反対する立

場に立った。そしてこの「サン・レモ会議」による「バルフォア宣言」の承認はアラブ民族であるパレスチナ人にパレスチナ・アラブ民族としての闘いを要求していったのである。

## 5 英国委任統治下のパレスチナ



General Sir Edmund Allenby entering Jerusalem, 11 December 1917  
Mandatory Palestine

「サン・レモ会議」決定の実行を目指す英仏軍による鉄拳政策は、逆にシリア・レバノン・イラク・パレスチナ各地で激しい抵抗の闘いとして続いた。ファイサル王まで追放されたのである。私がアラブに着いた当時から、フランスの植民地支配「同化主義」による言語・文化の押し付けと虐殺統治は英国よりも人々は激しい怒りで語ったものである。混乱は收拾できなかった。ファイサルはロンドンで「友人たち」から獲得物を得るために彼なりに奮闘した。



Proclamation of Abdullah as leader of Transjordan, April 1921  
Abdullah I of Jordan/ Abdullah I bin Al-Hussein/ Founding of the Emirate of Transjordan

英仏の虐殺に対抗し反仏反英闘争のためフサインの次男のアブドゥッラーがヒジャーズから部隊を率いて大シリア東部アンマンに進軍した。彼は、アラブ政府のイラク王として

て推戴された人物で、大シリア王のファイサルとともにアラブ独立国家の立憲王制を担うつもりであったが「サン・レモ会議」でその独立は無視されてしまった。英国統治はパレスチナでもイラクでも反乱を抑えきれず困難に直面した。時の植民地相ウィンストン・チャーチルは「新植民地政策」を構想し、ロレンスやファイサルとも話し合った。その上で1921年3月カイロにハーバート・サミュエルやロレンスを集めて新植民地政策を提案した。

チャーチルの案はアラブの抵抗を押しとどめるためにイラクはファイサルを王として迎え「委任統治国」から形式的に「独立国」として認め「同盟関係」を結び、石油利権には口を出させずアラブ政府にイラクを管理させることである。イラク全土の政治的鎮圧と同時に経済的には石油利権のほかに英軍駐留の縮小による無駄な出費を抑えることも目論んだのである。

これ以上「マクマホン書簡」や「サイクス・ピコ協定」の責任を追及させぬようチャーチル案は「アラブとの約束」を示しファイサルを通して妥結する方法である。ファイサルは英仏に逆らう考えがなく英国の後ろ盾のもとでイラク王になることに異存は無い。もちろんファイサルはフランスのシリア支配も、英国委任統治による「バルフォア宣言」の履行も、更にはイラクにおける英国の治外法権も認めたのである。

カイロ会議では、またヨルダン川東岸アンマンに武装対峙しているフサインの次男アブドゥッラーと交渉し委任統治をうまくやるためにチャーチルが、エルサレムでアブドゥッラーと会うことにした。ロレンスも加わり通訳しチャーチルはアブドゥッラーに、弟ファイサルをイラク王とする計画を話した。そしてアブドゥッラーにヨルダン川東岸のトランスヨルダン地域(現ヨルダン)を与え英国の政治的経済的後ろ盾のもとで統治する道を示した。アブドゥッラーはヨルダン川両岸のパレスチナを単一国家とする独立国家を当初主張したが結局東岸の建国にアブドゥッラーは同意し、西岸は「バルフォア宣言」

に基づいてユダヤ人入植にも同意した。(注27) そして反乱を抑えることを約束した。こうして大シリアはフランスの占領したシリアとレバノン、アブドゥッラーのヨルダン、英国支配のパレスチナと4つの分割国家となった。

この時から英が国際連盟に提起したヨルダン川東岸の委任統治放棄によってかつて「パレスチナ」と呼ばれたヨルダン川東岸から地中海までと南部レバノンを含むパレスチナは、英支配地域の新しい境界の小さくなった「パレスチナ」に確定した。

こうして大英帝国は、ペルシア湾からメソポタミア、チグリスユーフラテスからスエズ運河を含む北アフリカ地域まで英国に忠誠を誓う国々として作り上げた。「分割し支配し、アラブ人がアラブ人を管理する」新しい植民地政策である。

1921年8月ファイサルは立憲君主制のイラク王に即位した。ヨルダンもまた立憲君主制のアブドゥッラー一王のもと、1922年正式に国際連盟に認められた。

このようにオスマン帝国支配に代わって英仏植民地支配の「委任統治」や形だけの独立国家となり「独立」した王制国家は英に恭順を示すことで以降も権力を維持していった。(ヒジャーズ王父親のフサインは英の説得にもかかわらず「マクマホン書簡」の原則にこだわりパレスチナは他の国同様、独立国家とすることを求めた。その上シオニズムの最終目標がユダヤ人国家建設にあるとして、息子たちのような恭順を拒んだ。



Abdulaziz ibn Saud

結局英国は、アラビア半島ナジェド地方の王で力を持ったのちに、サウジアラビアの王となるアブドル・アジーズイブン・サウードが1924年ヒジャーズのフサイン王らを追放してメッカ・メディナの聖地を乗っ取る時サウードの側について、なすがままにフサイン王を見限った。(注28) そのためエジプト、スーダンからサウジアラビアまで、英との同盟の下アラブ諸国家が成立したのである。

この時代の初期アラブ民族運動の特徴は、英欧に同盟しオスマントルコからの民族独立を果たそうとしたことにある。しかし、これまでの封建制の支配層—宗教指導者部族長や首長、都市名望家地主など—のリーダーシップの下にあった闘いであり、「民族の利益」は限られた支配層のためのもので民衆の利益と一つの流れではない。

民衆の価値観は、感情的ではあるがイスラームの社会的平等や公正を求めており、知識人や軍人(彼らは農村出身者が多い)を中心にして、アラブ封建支配層の英仏への恭順に抗して反英反仏の反植民地反「バルフォア宣言」の民族運動がこの時期から育つのである。

その分王政勢力は民衆の要求と対立を避けつつ、英国とうまく同盟する道をさぐらざるをえないのである。「委任統治領パレスチナ決議」は、ヨルダン川東部のトランスヨルダンと分離されて1922年7月正式に国際連盟理事会に承認され、1923年9月に発効した。

実際には1917年末に英軍がエルサレムを占領して以降軍政を敷き、翌年にワイツマンが訪れ1920年からハーバート・サミュエルが初代パレスチナ高等弁務官として「バルフォア宣言」の実施がすでに前から始まっていた。

サミュエルのパレスチナ赴任時の人口はアラブパレスチナ人9割、ユダヤ人は多く見積もっても1割程度で土地も持っていなかった。(注29)

サミュエルは土地購入、移民誘致(当時ユダヤ人はマラリアが発生すると言ってパレスチナではなく米欧への移住人口が多かった。)将来のユダヤ人国家の土台作りを行っていく。

サムエルの委任統治政府はシオニスト機関設立も許しこの機関を軸に、ヘルツルの描いた「ユダヤ人国家」のように植民を通して社会のインフラや下部構造を作った。またユダヤ人の間に国会に相当する「ユダヤ民族評議会」、軍の萌芽となる武装自衛機関「ハガナ」を設立しヘブライ大学を開校するなど準備を急いだ。

英委任統治を円滑に進めるため英は、パレスチナ立法評議会設置を提案した。(イスラーム教徒8人キリスト教徒ユダヤ教徒各2人の公選の議員高等弁務官と英当局の選ぶ10人の23人の構成) 1923年に選挙を目指したがパレスチナアラブ側は英委任統治を拒否したため成立しなかった。

アラブ側はパレスチナ委任統治決議前文にある「バルフォア宣言を実現する委任統治」を認めなかった。すでに1920年10月部族宗教リーダーたちがハイファでパレスチナ・アラブ会議を開きパレスチナのアラブ民族政府樹立を英政府に求めることを決定してきた。彼らは、パレスチナ在住のイスラーム教徒キリスト教徒ユダヤ教徒が、直接選挙によって選出された議会に基づくパレスチナ国民政府の樹立やシオニストによる郷土建設の廃止などを求めている。

当初からパレスチナ・アラブの指導者たちは「バルフォア宣言」を踏絵とする委任統治を認めなかった。そしてパレスチナ・アラブ人の民族的政治的権利を求めた。英当局はこうしたアラブ人の諸権利を認めずシオニスト優遇政策をとった。当初から対立と矛盾に満ちた英統治であった。

サムエルは1920年から1925年までの5年間の任期中にユダヤ国家の基盤づくりと移民の増大に力を注いだ。またサムエルは、英植民地支配の常套手段の分断統治をパレスチナでは、ユダヤ人国家を考えて特に宗派的分断支配を考えた。(注30)



Amin al-Husseini

パレスチナ・アラブの名望家同士の軋轢や対立を利用して親英勢力を育てようとした。当初のその1人はハジ・アミン・フセイニーである。

彼は1895年エルサレムの名家に生まれイスタンブールの士官学校を卒業しオスマン軍に属していたが、反オスマン・アラブ独立戦争が始まるとヒジャーズ地方でフサインの長男アリの軍に加わった。「バルフォア宣言」を知ると英軍政下のエルサレムに戻り、反英反「バルフォア宣言」の闘いを開始した。1918年にはパレスチナでは初めての政治組織「アラブ・クラブ」を設立し闘った。こうした反シオニスト暴動や反英闘争によって英軍政当局の逮捕が迫ったためダマスカスに逃れて闘いを続けてきた。その後の軍政当局の欠席裁判でフセイニーは15年の刑を受けていた。軍政からサムエルの長とする民政に変わると再審によって許されたフセイニーはエルサレムに戻った。

サムエルの任命で英国統治領パレスチナ政府顧問官となり、当初フセイニーも委任統治政府と共存を模索したが、彼はサムエルの懐柔に乗る事はなかった。兄の死でエルサレムの大ムフティに選ばれると「イスラーム最高評議会」(注31)を設立しイスラームの利益を守るとして「バルフォア宣言」を認めなかった。



Yishuv/Histadrut

すでに英軍政時代から「バルフォア宣言」を原因としてユダヤ人とパレスチナ人の非和協的な衝突が始まっていた。1920年4月のエルサレムでの予言者モーゼの祭りでの両者の

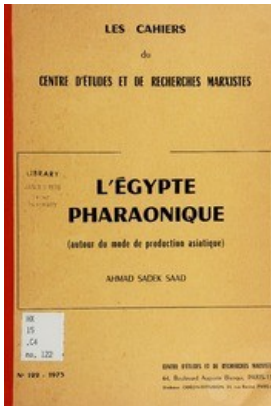
衝突、さらには5月メーデーなどこれらは汎アラブ規模の反英・反仏・反植民地闘争と連動した。ユダヤ人の側も武装していた。ワイツマンら親英シオニストに対し、東欧・ロシアの労働シオニズム(社会主義シオニズムともいう)がイシューブ(ユダヤ共同体)やヒスタドルート(労働組合)を中心に増大し、のちの初代イスラエル首相ベングリオンの指導下最大の勢力であった。またワイツマン、ベングリオンらのシオニズムに反対する「修正シオニズム」も体系だってきた。



### Ze'ev Jabotinsky

これは労働シオニズムに対抗する、リクードのベンジャミン・ネタニヤフらの始祖の系譜である。この「修正シオニズム」のリーダーはジャボチンスキーでヨルダン川東岸を含むパレスチナ全土を「エレッツ・イスラエル」(イスラエルの土地)と主張した。ジャボチンスキーの考えは「鉄の壁戦略」に示される。「ユダヤの軍事力を絶対的優位に立たせることが国家建設だ」とする考えであり英軍事力に頼るワイツマンら親英シオニストを批判する。アラブ人がユダヤ人のあまりの強さにユダヤ人を排除すると言う望みを放棄した時だけ平和共存が成り立つとし「そのような合意に至る唯一の道は『鉄の壁』すなわちどんな場合でもアラブ人の圧力にびくともしない権力をパレスチナに我々が確立して初めて得られる」(注32)と言う考えである。

この修正主義シオニストの「鉄の壁戦略」は対立している社会主義シオニスト、労働シオニストと言われるベングリオンらと根本は共通した戦略である。29年シオニストらはユダヤ人社会の最高機関として「ユダヤ機関」を創設した。ヒスタドルートの代表であったベングリオンがこのユダヤ機関の議長に選ばれた。シオニストは英国統治当局と同盟してパレスチナの土地と人々を支配しようとした。英国委任統治でパレスチナはどう変わったのだろう。



### Sa'd, Aḥmad Ṣādiq

ユダヤ教徒出身のエジプト共産主義者の歴史研究者アハマド・サーディク・サアド(1919~1988年)は1947年の著作「植民地主義の爪にとらわれたパレスチナ」の中で次のように記している。(以下は長沢栄治著「アラブ革命の遺産」の著者解題からのサアドの引用である。)

「パレスチナ経済は、少数の独占資本が後進的な経済に寄生する植民地経済、と言う特徴を持つ。英国は占領直後から、ヨルダン川の取水権や死海の塩資源の利権など少数の外資系銀行に農業金融を委ね、陸運業では『協同組合的』機関に莫大な利益を上げさせている。またシオニスト企業に対しては手厚い関税を与える一方、これからの新規工業の育成のためにアラブ住民が納めた間接税による財政収入を充てている。関税の保護を受けられないアラブ農民が、農産物価格の下落によって

打撃を受けているのに対し、シオニスト系商業資本は、第二次世界大戦中の委任統治政府による輸入小麦の放出で法外な利益を得ている。」と記している。

パレスチナ経済は、英国資本主義体制に組み込まれ塩や農産物などの第一次産品を輸出し、工業製品や小麦など主要食料を輸入する植民地特有の従属経済に変わった。商業工業金融においても独占手法はパレスチナの民族工業の発展を妨げオスマン時代の土地法や灌漑の開発の遅れはアラブ農業の停滞を生んでいるとサアドは述べている。

植民地経済はアラブ人の貧困化をもたらしシオニスト企業による肥沃な土地の取得によってアラブ

人たちには土地無し農民が増大し、小作料と税の高騰で離農を強いられ困窮化したのである。サアドは経済的搾取がその政治的隷属と結びついている証明として、アラブ人に対する英当局の教育政策の軽視をあげている。初等中等教育は義務化されない一方でアラブ人の大学などの高等教育が欠如し住民が自費での学校建設を申請しても英当局から許可されない。そのため非識字率は児童の4分の3、成人の86%にもものぼると告発している。

こうしたパレスチナ経済はシオニストと英国資本が一体となってパレスチナに対する搾取収奪のため、格差を生みそれが社会的不安定の土台をなしているのである。(注33) (サアドはまたヒスタドルートやキブツの「社会主義」的偽装によってユダヤ移民を安い労働力として受け入れつつユダヤ内の人種差別の横行も言及している。)

## 6 パレスチナアラブ民族主義者の闘い

シオニストたちがパレスチナ各地で不在地主から高値で土地を購入し小作農のアラブ人を何の保証もなく追放するために、衝突事件が増大する一方であった。1930年にはユダヤ人口は全人口103万余人のうち17%に急増した。1929年8月には歴史的にもよく知られた「嘆きの壁事件」が起きた。ソロモン王の第二神殿のあとの西壁は「嘆きの壁」と呼ばれるユダヤ人の聖地だが、その地はアラブ人にとってもアルアクサーモスクや岩のドーム(ウマルモスク)がある聖地に接している。この日、修正主義シオニストグループが挑発行進を行い衝突に発展しこのエルサレムの衝突はパレスチナ全土に広がった。双方の死傷者は800人を超えた。激しい対立は日常となりユダヤシオニストもパレスチナアラブ側も武装した。



Istiqlal circa 1932. Darwazah seated centre, al-Haj Ibrahim seated second left, Ahmad Shuqeiri standing first left. Standing: Ahmad Shukeiri, 'Ajaj Nuwayhid, Fahmi al-Abboushi, Subhi al-Khadra, Majid al-Qutub Sitting: Salim Salamah, Rashid al-Hajj Ibrahim, Muhammad Izzat Darwaza, Akram Zu'aytir

//Independence Party (Mandatory Palestine)/ Izzat Darwaza/Awni Abd al-Hadi//Palestine Arab Party/Jamal al-Husayni//Homeland Defenders Party

1933年エルサレム蜂起など民族主義者の反「バルフォア宣言」反英植民地闘争の激化に委任統治当局は武装シオニスト勢力でイスラエル軍の前身組織「ハガナ」と協力してアラブ人弾圧に当たった。激しい攻防が続いた。



Sheikh Izz ad-Din al-Qassam, killed fighting the British in 1936



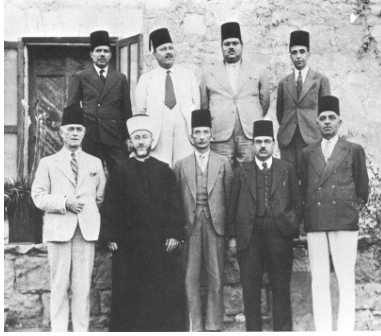
1936-39 revolt against British



Izz ad-Din al-Qassam /Izz ad-Din al-Qassam Brigades

1935年11月アラブ農民貧民の良き相談相手でありパレスチナ解放を訴える反英反シオニストのイスラーム指導者、シャイフ・イッズディーン・アルカッサームが英軍との銃撃戦で殺された。彼をパレスチナ解放の殉教者と敬愛する人々の葬儀が抗議デモとなって、全パレ

スチナを覆った。(現在もその敬愛の情は「ハマース」の武装組織の名称「アルカッサーム隊」に示される。)この機に古くからの独立党(イスティクラール)や、34年に結成されたパレスチナアラブ党ら民族主義5党が統一戦線を結成しアミン・フセイニーを議長とするパレスチナアラブ統一民族組織として36年4月「アラブ高等委員会」を作り上げた。



March 16, 1948 Palestinian Arab Higher Committee Representative Isa Nakhleh//Arab Higher Committee

各地の民族委員会を基盤にした全国的「アラブ高等委員会」である。この中には、ファイサルと共に闘いファイサルの親英路線を糾弾した者たちも多い。指導部は独立党(イステクラール)、パレスチナ・アラブ党、祖国防衛党や政党の代表ら10人であった。こうして各地の「反シオニズム・アラブ独立闘争」として民族主義者を統一した。このアラブ高等委員会は委任統治の廃止によるパレスチナの独立ユダヤ移民の停止、土地売買の禁止をスローガンとして「組織された反乱」を開始

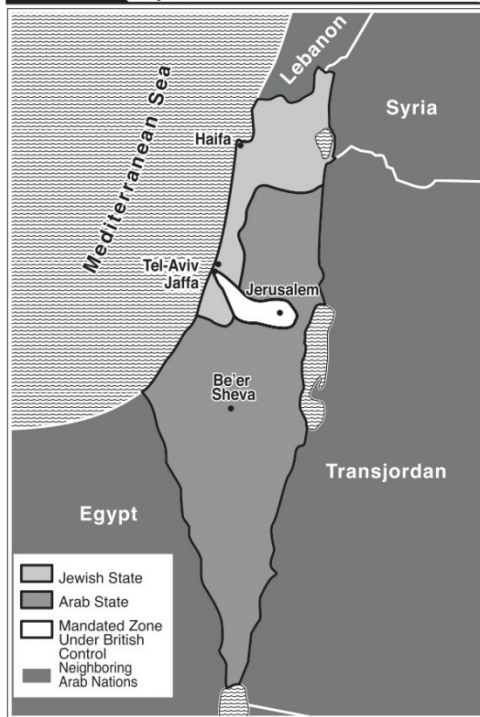
した。



1936-1939 Arab revolt in Palestine/The Great Revolt

1936年4月ゼネスト宣言を発し犠牲を強いられながらもそのゼネストは6ヶ月も続いた。武装ゲリラ戦も闘われパレスチナ民族総力戦のインティファダ(蜂起)となり36年から39年まで続きアラブ諸国にも影響を与えた。英軍は兵力の増強を本国に求めシオニストの「ハガナ」(のちのイスラエル軍)の協力を得つつ領土弾圧を続けた。その一方で英政府はパレスチナ諮問委員会を組織し1937年ピール調査団をパレスチナに送り込み調査させた。その結果を「パレスチナ白書」として7月公表した。

Map 4 Peel Commission Partition Plan, July 1937



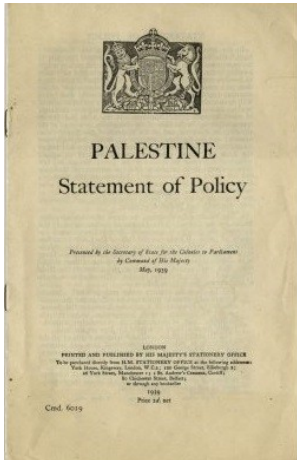
この白書で両民族による単一パレスチナ国家方針は両方を満足させないと結論づけた。そして英委任統治は1つのパレスチナにユダヤ人の民族郷土を作ることを断念し当面5年間はユダヤ移民を1.2万人に制限すること。そしてパレスチナをユダヤ国家アラブ国家、英委任統治地区に3分割することを求めた。分割案では、ユダヤ国家はパレスチナの約20%領分でテルアビブ、ハイファなど地中海沿岸を含むものであった。アラブ国家はネゲヴ砂漠を含む70%以上の領分であった。エルサレム・ベツレヘムなど戦略地点は英統治地区とした。シオニズムのリーダーとなったベングリオンは初のユダヤ国家として原則的に受け入れると表明しその一方で息子への手紙で「これはユダヤ国家の始まりに過ぎない」(注34)と述べているようにとっかかりと考えた。

アラブ高等委員会は拒否した。その理由はユダヤ国予定地内のアラブ人所有地はユダヤ人所有地に比し不公平でありアラブ国家にはこれまでの経済活動の中心地が失われユダヤ国に依存する構造が作られること、またユダヤ人国家は将来の移民増加に、この案に満足せず新たな領土要求は必至

なことを挙げた。英当局は翌1938年には今後は分割では解決できない、と言う次の調査報告が出るなど混迷した。ピール調査団も英当局もユダヤ移民を停止しなかったし、この分割案によってユダヤ国家の中で突如「パレスチナ少数民族」として扱われる故郷に住む人々は激しくさらに怒りを爆発さ

せた。

英軍は反乱を終わらせるための強権発動で1937年10月アラブ高等委員会に解散命令を出し、11年緊急法令に基づく軍事法廷を設置し各地のストライキ委員会を非合法化し逮捕し、リーダーらを英植民地のセーシェル島に流刑した。英が懐柔できなかったハジ・アミン・フセインーもパレスチナから追放された。パレスチナの闘いは壊滅させられた。フセインーはダマスカスに拠点を移して反英闘争を闘いイラクに移り後にドイツにも滞在しヒトラー政権とも友好を築いた。なぜならシオニストと英のパレスチナ人への弾圧に手を差し伸べたのは敵国ドイツであった。反英植民地解放を闘う者たちがその敵対国に期待を寄せるのはアジアでも同様であった。反英反植民地を闘う反英のインド人らアジア人らが日本のファシズム政権に期待を寄せたり援助を求めたり利用したのと同様と言えるだろう。アミン・フセインーがシオニズムに反対しつつ「反ユダヤ主義」に無批判であったこともアラブ民族主義の限界、当時の負の側面であった。



### White Paper of 1939/MacDonald White Paper

1939年に欧州で第二次大戦の危機を迎えると英国政府は結局「バルフォア宣言」を反故にするような「パレスチナ白書」(「1939年白書」または「マクドナルド白書」と呼ばれる)に転じる。迫りくる戦争の危機に英国はスエズ運河や陸路からペルシヤ湾を通して東アジア、インドに抜ける戦略的重要性に鑑みアラブ諸国との友好をつなぎ止めておく必要があった。そこで1939年2月ロンドンでパレスチナ問題解決のためのアラブ諸国代表やシオニストを招いて協議し、その5月「39年白書」を表明したのである。この新提案は英国はアラブ人の意志に反してユダヤ人国家を作る事は無いと表明し、10年以内にパレスチナ独立国家を樹立しこの内でアラブ、ユダヤ人が政権を分かち合うとした。1939年4月から5年間に計7.5万人のユダヤ移民を受け入れるがその後はパレスチナアラブ側の同意によって決める。パレスチナのユダヤ人口を3分の1に抑え土地取引の禁止や制限を行うなどの内容である。シオニストはこの「39年白書」が「バルフォア宣言」の約束を反故にしたと激しく拒否した。パレスチナ側は10年以内のパレスチナ建国に「但し書き」で変更が可能となっており英政府はまたしても「マクマホン書簡」のからくりを持ち出したと拒否した。

シオニスト・ベングリオンは英国に見切りをつけ米国ユダヤ人社会を基盤とする米シオニストを通し米政権に接近していくようになる。シオニストは米国の帝国主義の力の増大を見て米政府を通して英国のパレスチナ政策の変更などの自らの要求を通すことを企みその一方でパレスチナへの非合法移民の拡大を図っていくのである。このように英パレスチナ委任統治は未解決混迷状態のまま1939年9月第二次大戦が勃発した。パレスチナやアラブ全体が新しい局面に入ったのである。

この章のはじめに述べたようにアラブ・パレスチナ解放を考えたとき、私は「アラブ民族」「アラブ民族主義」について考えずにはいられなかった。「アラブ民族」が人種とか種族、血族を超えた同族帰属意識を持つ集団であると述べた。つまり民族は生物学的科学的な人種などと違ってそれを超え、共通の言語によって結ばれ生活や文化の中から歴史的に形作られた人間同士の主観認識と承認によって自己規定される帰属集団と言うことができる。このアラブ人の「アラブ民族主義」を形成している特徴を挙げるなら第一にその複合的アイデンティティーである。もちろんどの民族にも複合性はあるがアラブにはより多様で複雑なそれがある。どのアラブ人も重層的歴史を掘り下げればルーツは種族、部族、宗教などの違いがありそれぞれが様々な局面でどれを重視するかも一様ではなくアラブと言う大きな帰属意識よりもそれらがある局面では地域性や宗教や血族やイデオロギーがより重視さ



れる分、同族意識の内にも諸々の矛盾を内包している脆さがある。

第二の特徴は、アラブ民族主義が形成されてきた歴史的条件と深く結びついていることだが「イスラーム主義」と「近代主義」と言う二つの価値観を内包しているところにある。それは固定的なものではなく流動的に混在している分、反動性と進歩性と言う両義性を常にはらんでいる。アラブ民族主義は宗教の多様性を持つが同時にイスラーム抜きには考えられない。シャリーア(イスラム法)に基づく社会構成が資本主義への形成過程で近代主義の西欧の文化社会支配にさらされたためアラブ側からの近代主義テーゼを含み持っているとも言える。それは必ずしもイスラームが反動的で、近代主義が進歩的であると言うことではなく両方ともある時、例えば植民地主義やシオニズムに対決する進歩性のうちに、反動性を持っていると言うことに示されている。

アラブで「民族意識」が覚醒され、民族主義が主張された契機は外部の刺激であり、摩擦や不利益に対する危機意識であった。アラブ人は民族意識を持って自民族の独立を求める闘いに結集した。民族主義運動は民族の尊厳を自己肯定して闘う分、自分たちの否定面も丸ごと肯定に転位させる傾向を持つ。そうすると自らを美化し、自己幻想に陥り、力を過信し熱情に流れる傾向を持たざるを得ない。それが自然成長的に排外主義を生み「反シオニズム」の闘いが「反ユダヤ主義」に流れる危険を生んでいったのである。自民族の抑圧差別に抗し独立と尊厳を求めて闘う時、抑圧差別されている他の同様の民族集団に対する共感連帯する視座、意志と力を持つことができるか否か、こそが、民族主義の健全さを示すメルクマールであろう。

また民族主義運動は「民族の利益」の名で実際には多様に分裂している諸階層の利害を覆い隠し民衆の不満を民族の政治目標に動員させる傾向を持つ。これは民族の統一を実現すると言う長所があり搾取や収奪のままに公正を不問にする短所もある。民族主義運動は政治運動であり力のある者、権威を持つ者支配者が全体を掌握する構造を作り出す。その分、支配・被支配関係や封建的社会構造は固定したまま強権的指導を許していく傾向を持っている。民族主義、民族運動はそれ故指導者指導部の規範が重大な決定的要素となる。

アラブ民族の独立を目指したフサイン一家は彼らの立場の利益に基づいて英国との同盟を選択し騙された。しかし反英民族主義運動の激化の中で息子は結局英国と利益を分かち合うことで、民衆の上に君臨する特権におさまった。父は封建的民族主義を貫くことで利権を失いヒジャーズから追放され最後は息子アブドゥッラーの統治するヨルダンで病死した。初期民族運動は民族の勝利ではなく特権層の利益で終わり民族の矛盾が解決されないことが示された。その後の委任統治支配下でパレスチナの民族主義者たちは一方で独立を求めて闘い他方で過剰な民衆の熱情に埋没せず闘うことが問われた。

しかし「パレスチナ・アラブ民族」としての強いられた登場の中で「バルフォア宣言」に抗しパレスチナの独立を求め蜂起し戦略戦術をもちえぬまま英当局に軍事的に壊滅させられていった、1930年代の闘い——ゼネスト・パレスチナ全人民蜂起——は今に至る厳しい力関係の中で闘うパレスチナ解放闘争の序曲だったのである。

## 7 パレスチナの社会主義・共産主義潮流

民族主義運動以外の革命・人民勢力潮流はパレスチナにも20世紀初めには生まれていた。民族主義運動の高揚の時代、共産主義者らはその反ユダヤ主義的傾向を批判しつつ闘っていた。それはアラブユダヤ知識人や労働者が反帝反シオニズムの反植民地闘争を闘う上で少なくない影響を与えてきた事は間違いない。当時はコミンテルンの指導下にあったそうした共産党の闘いはコミンテルンの戦術転換の中で困難に直面したのも事実であった。

19世紀のマルクス主義・社会主義の思想理論がアラブに届くのは19世紀末から20世紀初めの独や

欧州ロシア革命運動の影響であった。

オスマン帝国支配下でアルメニア、ギリシア、クルド、アラブ人たちの労働運動に影響を与えた流れはいくつもあった。しかしパレスチナ共産主義革命運動はアラブの民族主義運動の中からではなくシオニズム左派の「社会主義シオニズム(労働シオニズム)」の中から生まれてくる。

この歴史的事実はパレスチナ共産主義運動がシオニズムの影響を受けたり、またユダヤ人とアラブ人の統一の困難を作り出していきののだがそれは時代の限界とも言えるものだったのだろう。



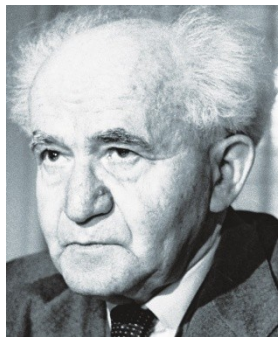
Poale Zion (Workers of Zion).  
Members of Poale Zion by the portrait of Dow Ber Borochow, before 1933  
Jewish Social Democratic Labour Party (Poalei Zion)  
ロシア領ウクライナ出身のベール・ボロホフはシオニズムと社会主義の融合理論によって組織「ポアレイ・ツィオン(シオ

ンの労働者)」を結成した。この組織の活動家たちがパレスチナに社会主義ユダヤ人国家建設を求め多数移住し始めたのは1890年代以降であった。



The General Jewish Labour Bund in Lithuania, Poland and Russia

当時のロシア東欧のユダヤ人の労働運動の主勢力は「全ユダヤ労働総同盟(ブント)」でのちにロシア社会民主党(後のロシア社会民主労働党)の創設にも加わっている。ブントは「社会主義シオニズム」の領土的野心、侵略性を批判し、「ユダヤの文化的自治」を求めた事はよく知られている。

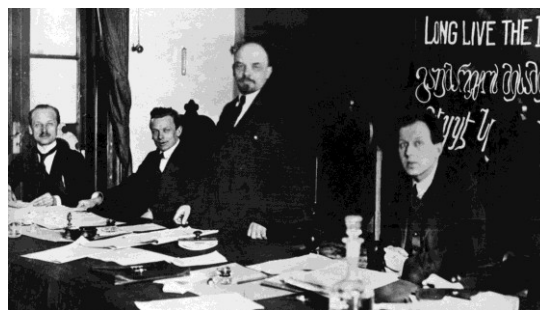


David Ben-Gurion

「ポアレイ・ツィオン」の活動家だったダヴィド・ベングリオンは1906年20歳でポーランドから農業労働者としてパレスチナに移住してきた。後にイスラエル建国の父と言われるベングリオンと彼の仲間らはパレスチナのアラブ人はアラブ国家の一部であり固有の国民的集団を構成していないという理屈でパレスチナにユダヤの領域国家建設することを正当化した。

「ポアレイ・ツィオン」は「労働の征服」などと称してアラブ人労働者や農民排除を強め労働組合からもアラブ人排除を1906年に決めている。これに対し少数派のポアレイ・ツィオンのものがこのアラブ人の排除に反対した。さらに後

にロシア革命の評価をめぐって対立し少数派はベングリオンらの多数派を「民族主義的シオニズム」と批判し「プロレタリアシオニズム」を掲げた。



Russian October Revolution/Bolsheviks Revolution 1917  
1st Kommunistische Internationale 1919  
この頃ロシア革命後

1919年3月第3インターナショナル(コミンテルン)が結成されている。この流れもあったのか少数派は1919年10月「ポアレイ・ツィオン」を脱退して「社会主義労働者党(MPS)」を結成しロシア社会主義革命を支持した。シオニズムから共産党が生まれていくのである。このMPS結成大会は事実上のパレスチナ共産党第1回大会と見なされている。MPSは移民ユダヤ人から始まりアラブ人との階級的統一や共同を目指した。



Mifleget Poalim Sozialistiim; (MPS) / Socialist Workers Party (Mandatory Palestine) / Yaakov Meiersohn

パレスチナが英軍政から1920年委任統治下に入ると「反英・反植民地・プロレタリアシオニズム」を掲げパレスチナ統一革命社会主義党の設立を模索した。しかし実態はユダヤ移民社会にしか基盤はなくシオニズムに基づくユダヤ国家建設を否定する事は自己矛盾もあっただろう。がアラブ、ユダヤ人労働

者農民と対等な社会の建設を求めた。

2nd competition of MPS/Jewish Socialist Workers Party — Poalei Zion 1920

1921年のメーデーではMPSは「社会主義シオニスト」の「ポアレイ・ツィオン」のベングリオンらのヒスタドルートの労働者と対立衝突し、退却に際してアラブ住民に襲われ衝突する事件を起こしている。アラブ住民にとっては、シオニストユダヤ人は誰もが侵略者なのである。

1951 Egyptian Socialist Party/Hosni al-Arabi/1922 Egyptian Communist Party

3rd competition of MPS/ Jewish Communist Party — Poalei Zion, section of the Palestine Communist Part 1921



この衝突などで英統治当局から22年1月MPSは非合法化され指導部ら150名以上が国外追放される壊滅的な結果となった。

4th competition of MPS /Palestine Communist Party (1922) /Communist Party of Palestine/1923 Palestine Communist Party (PCP) / Joseph Berger-Barzilai

その後「プロレタリアシオニズム」を評価する多数派のMPSと「シオニズムは労働者階級の利益と相容れない」とする少数派に再び分裂する。少数派はコミンテルンへの加盟を求め

国際共産主義運動の一翼として闘うべきだと主張した。コミンテルンの指導もあったのだろう。多数派と少数派は再統一して1923年7月第5回MPS大会において「シオニズムと絶縁して闘う」ことを決定しコミンテルンへの加盟申請を決議した。

5th competition of MPS /Palestine Communist Party (PCP) 1923

ここに1923年7月23日パレスチナ共産党が結成され1924年2月MPSはコミンテルンへの加盟が認められ「パレスチナ共産党(PCP)」として公式に発足した。この加盟にあたってコミンテルンは第一にアラブ人を含む地域党への改革、第二に反帝反シオニズムのアラブ植民地解放運動を重視した路線を求めた。「プロレタリアシオニズム」に示されるようにユダヤ知識人移民が多数であったが1924年7月の大会で「アラブ化」のスローガンを採択した。

6th competition of Palestine Communist Party/

「アラブ化」とはユダヤとアラブの間の民族矛盾こそ英帝国主義植民地支配の基盤となっており階級的なアラブ人、ユダヤ人の利益を中心に据えて統一して闘うという決定である。シオニズムと決別

しアラブブルジョワ民族主義やシオニズムの影響を脱してコミンテルンの権威と支援のもと国際階級闘争の一翼としてパレスチナでの闘いを開始している。



Palestinian Arab Workers society (PAWS) / the first countrywide congress of Arab workers

1924年のアッファラ村では、不在地主が土地を自分たちに売却したとシオニスト入植者がアラブ農民を暴力で立ち退きを求めて衝突すると、PCPはアラブ農民の土地収用に反対して闘った。1925年にはユダヤ民族評議会選挙でPCPは2.5%の得票を得ている。この頃PCPとは全く別にパレスチナ・アラブ労働者協会(PAWS)も結成された。シオニスト左派のベングリオンらの企みでヒスタドルートの労働組合から排除されたアラブ人はハイファの鉄道労働者のアラブ人中心に労働運動の中から1925年10月に労働組合活動に限定した非政治団体としてPAWSを結成した。

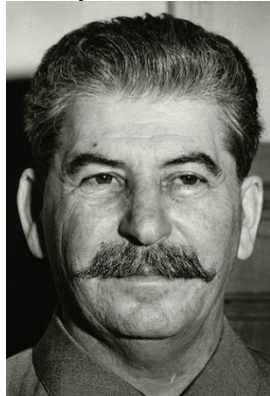
しかし植民地支配下、非政治的ということ自体が難しい。PAWSの呼びかけで1930年には後に、第一回パレスチナ・アラブ労働者会議が開かれアラブ労働総連盟が結成されるなど共産主義者たちが支える動きとなっていく。(注35)

Federation of Arab Trade Unions/Bulus Farah

パレスチナにおける共産党創立の先駆的な闘いはシリア・レバノンやイラクへと波及していくことになった。植民地下の反帝統一戦線を求めPCPはアラブ独立党など民族主義勢力の一部とも共同の兆しも生まれた。

1924Lebanese People Party/ (Lebanese Communist Party) / Syrian-Lebanese Communist Party//Youssef Ibrahim Yazbek/Fou'ad al-Shmeli,/ Michel Aflaq

1924Syrian Communist Party/ Khalid Bakdash



Kommunistische Internationale/ 6th World Congress/Joseph Stalin

しかしコミンテルン第6回大会(1928年7月~9月)はスターリン路線のもと、一国社会主義論に基づいて反帝統一戦線から民族ブルジョワジーや社会民主主義勢力を主要打撃へと求める道に転じた。

その上でコミンテルンはアラブ人党員の拡大幹部登用のアラブ化を求めた。コミンテルンはアラブ諸国の共産党連合による反帝反植民地反封建闘争へと導こうとした。

この闘争主体としてアラブ労働者農民の階級形成に期待を寄せたのだろう。この指導方針は反シオニズム反「バルフォア宣言」を求め急進的な闘いの民族主義運動と対立しつつPCPの急進化を促した。

1928 Muslim Brotherhood (Egypt) /Hassan al-Banna/Sayyid Qutb



Western Wall Case/1929 Palestine riots

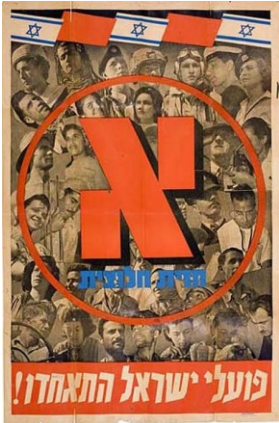
Leopold Trepper/Palestine Communist Party (PCP)

1929年には修正シオニストの挑発から「嘆きの壁事件」が起きると衝突が広がった。

この衝突に対しユダヤ黨員らの間でこれはポグロム・反ユダヤ主義だとして党内論争となったがコミンテルンはアラブ植民地解放闘争と見て評価した。

アラブの封建的指導部の下にあった闘いが急進化したのを見て反帝民族解放の一面をコミンテルンは評価した

のだろう。パレスチナで反英反植民地闘争主体がアラブの民族的枠を超えてどう闘うかが問われていた。コミンテルンはPCPがユダヤ人を主構成員とする党からアラブ化を求め続けた。



Eretz Yisrael, "Workers' Party of the Land of Israel (Mapai)

まだ未熟なPCPは「アラブ化」路線によってアラブ民族主義運動の急進化に流されざるを得ない。

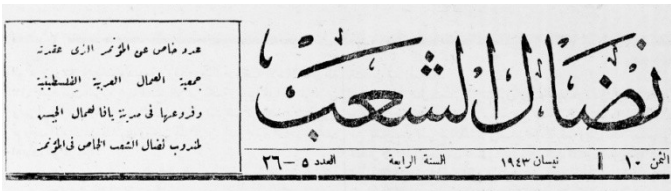
ベングリオンらシオニスト左派は、パレスチナ共産党がアラブ人にユダヤ人虐殺を先導しているとデマを流し、ヒスタドルトからのPCP排除を図った。そしてベングリオンらは1930年労働党(マパイ)を創立し欧州のシオニストや第二インターナショナルと連携して対抗した。

7th competition of Palestine Communist Party

当時のPCPの行動綱領は第一に英委任統治の廃止、第二に「バルフォア宣言」の廃止、第三にシオニスト移民停止、第四に委任統治当局、シオニスト、アラブ大土地所有者から土地を奪い農民、ベドウィンへの分配、第五には帝

国主義の暴力には人民の革命的暴動で対抗を求めていた。しかしアラブ民族主義指導部とは批判を続けたまま対立したままにあった。

英国当局は1931年集中的にPCP弾圧を行いシオニストと協力して国外追放処分とした。32年から武装闘争で対抗したPCPは1932年には200人以上さらに国外追放の打撃を受けた。PCPは民族主義者と競合するように運動の高揚を作り、その高揚はハジ・アミン・フセイニーらの民族主義運動の33年10月のエルサレム大蜂起へとつながっていく。



Radwan al-Hilu (Musa) (PCP Secretary General)  
الدكتور ضوان

Palestinian Communist Party Newspaper/Nidal al-Sha'b/The People's Struggle

PCPはユダヤ人幹部逮捕の中でソ連に留学経験のある共青幹部のアラブ系党员ラドワ

ン・アル・ヒル(通称ムーサ)が書記長となってPCP再建に乗り出した。アラブ各国でもコミンテルンの支援のもと共産党が民族主義運動を批判しつつ成長していた。1933年独でヒトラーが政権を取りユダヤ人迫害が深まるとパレスチナへのドイツからの移民が急増した。

1934 Partido Comunista Iraquí/Rayat ash-Shaghilah/Hamid Majid Mousa



Kommunistische Internationale/7th World Congress/Georgi Dimitrov/Radwan al-Hilu (Musa · Yusuf) speech

こうしたナチズム・ファシズムの台頭に対しこれまでの社民主要打撃路線の行き詰まりもあって1935年7月から8月第7回大会に於いてコミンテルンは「反ファシズム人民戦線路線」の広範な統一戦線へと方向転換した。パレスチナ共産党も人民戦線路線に呼応し、反帝反シオニズムに絞りアラブ民族主義者との統一戦線を打ち出していた。

しかし党内にはシオニスト左派との統一路線を求めるものもいた。この頃すでに述べたシェイフ・カッサームの死に抗議し「アラブ高等委員会」が結成され

て民族主義勢力が全パレスチナ住民とともに激しく闘う時にあたる。ムーサ共産党書記長はパレスチナアラブ民族の大団結を訴えアラブ高等委員会との共闘方針を打ち出した。

PCPもアラブ高等委員会と共同し委任統治当局に対する長期ゼネストや武装闘争の全国化によって英委任統治を麻痺させるべく闘った。有名な36年から39年にわたるアラブ大蜂起である。しかしムーサ書記長がPCPを排除しているアラブ高等委員会を支援し共闘すると言う「アラブ重視路線」は

PCP党内に亀裂を作り出した。

ムーサ書記長の逮捕など党内混乱の中ユダヤ人指導部の中から党中央路線はアラブ・ブルジョア民族主義への追従であると批判が広がり党内は分裂状態に至った。

PCPは委任統治当局の激しい弾圧下、非合法化され、民族主義勢力も解散・非合法化される中で闘いながら壊滅的被害を共に受けた。こうした困難の中で第二次大戦が勃発するのである。アラブ人とユダヤ人の利害の違いや排外主義の中、反英・反植民地・反シオニズム闘争として階級的に統一するための民族主義的なうねりを凌駕する力はPCPにはない。民族的感情の渦巻く状況の中で分裂の危機を克服できなかったのである。

### < 註解 >



- ① 奥平剛士(1945年～1972年)日本人として最初のPFLP義勇兵に志願し、1972年5月30日のリッダ闘争の部隊指揮をとり日本人として初の戦死
- ② G・アントニウス『アラブの目覚め』第三書館刊 46Pによると、初めてのシリア科学協会には宗派の指導的アラブ人すべてが参加し、会員の数は150名にのぼった
- ③ G・アントニウス『アラブの目覚め』82P.この秘密結社は、①レバノンと連合の形式でシリアの独立を求める②アラブ語を国の公用語と認めることを要求③表現の自由と教育の普及に対する検閲や諸制度の撤廃などを掲げた。
- ④ 『アラブの目覚め』P99
- ⑤ ウォルター・ラカー『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』第三書館 14P～15P
- ⑥ 1881年ロシア帝国下のハルコフで学生たちによって作られた。イザヤ書の「ヤコブの民よ、来たれ、我ら行かん」の頭文字から名付けたグループ(『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』111P～112P)
- ⑦ 『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』5P
- ⑧ テオドール・ヘルツル『ユダヤ国家』法政大学出版局 1P
- ⑨ 『ユダヤ国家』II 総論 33P
- ⑩ 『ユダヤ国家』V ユダヤ協会・ユダヤ国家 86P
- ⑪ 『ユダヤ国家』II 総論 30P
- ⑫ 『ユダヤ国家』V ユダヤ協会・ユダヤ国家 91P
- ⑬ 『ユダヤ国家』V ユダヤ協会・ユダヤ国家 91P
- ⑭ 『アラブの目覚め』545P 原注でハーバート・サミュエル回想録で記されたとされる
- ⑮ 「バルフォア宣言」(翻訳文)は、『パレスチナの歴史』(奈良本英祐著)より引用
- ⑯ 『アラブの目覚め』291P
- ⑰ 『アラブの目覚め』263P
- ⑱ 『アラブの目覚め』280P
- ⑲ 『アラブの目覚め』499Pに1918年11月付「英仏共同宣言」訳文がある

- ⑳ 『アラブの目覚め』313P
- ㉑ 『アラブの目覚め』314P
- ㉒ 『アラブの目覚め』321P～322P
- ㉓ G・アントニウスは、この調査団に加わった
- ㉔ 『アラブの目覚め』323P～326P
- ㉕ 『アラブの目覚め』337P
- ㉖ 『アラブの目覚め』339P
- ㉗ 『アラブの目覚め』348P
- ㉘ 『アラブの目覚め』367P
- ㉙ 『アラブの目覚め』430P 大戦終結時、ユダヤ人は5万 5000 人不足であった
- ㉚ 第一次大戦時の民族運動の流れから、アラブ独立党(イスティクラール党)、フセイニーのパレスチナアラブ党、フセイニーと対立する名望家のナシャビー一家の祖国防衛党、宗教的社会運動カッセーム派、共産党、アラブ労働者協会などが、反バルファ宣言運動の政治潮流としてあった。
- ㉛ 「イスラム最高評議会」は、宗教的分野に限定するものとして、英委任統治政府が許可した
- ㉜ アヴィ・シュライム『鉄の壁(上)』 緑風出版社 67P
- ㉝ 長沢栄治『アラブ革命の遺産』401P～404P
- ㉞ 『鉄の壁(上)』77P
- ㉟ 臼杵陽『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所 73P～74P



**目次** <http://0a2b3c.sakura.ne.jp/sigenobu-pale-bz.pdf>



**第2章** <http://0a2b3c.sakura.ne.jp/p-ls-2.pdf>